

【平成 18 年 発表分】

身に徳を積むことを教えられ、会社を再建

第五連合第一本清組 中谷恭治

ありがとうございます。

今から十年前の冬、私の心は、この世の果てにありました。信頼していた身内に、今まで積み上げてきた会社の信用を泥まみれにされ、全財産を奪われてしまった私は、生きる目標も、心のゆとりも失い、すさみきったどん底の心境にあったのです。「裏切った相手が憎い」という思いだけで、毎日を無為に過ごしておりました。そんなとき、仕事上の師匠として、以前からご縁のあった友近忠至さんと、時間を持つことができました。

友近さんは松風寺出身の本門佛立宗のご信者で、現在は八王子清流寺の幹部として、また宗門の研究所の理事として、多方面にご活躍をされていますが、当時の私はもちろん、そんなことは知りませんでした。ただ東京で大成功された、松山出身の企業家の大先輩として、親しくご指導をいただいております。

経営の失敗を愚痴る私に、友近さんはこう言いました。「お前が裏切られたのは、自分に徳がないからだ。徳がないということは、裏切られるべくして裏切られただけ。今も人を恨んでばかりで、自分をまったく見ていないじゃないか。それでは何の解決にもならないよ。自ら徳をいただく努力をしようよ」と。

予想もしなかった話の展開に、私は目の覚める思いがしました。そんな私に友近さんは、「私自身の不徳とはどういうことか」「生きる意味とは何か」といった話を、朝まで熱心に話してくれました。必然のように友近さんと私は、そのまま夜明け前の松風寺の御宝前に座っていました。吉田御導師との出会いでした。

初めての朝参詣のあと、御導師から「一心不乱に南無妙法蓮華経とお唱えすること」を教えていただきました。早速その朝、本堂で再会した樋口明さんに教化親になっていただきました。

実は樋口さんは、父の古い同僚で、私は子供の頃から可愛がってもらっておりました。ですから初めて参詣した松風寺で、パツパツと顔を合わせたときにはほんとうに驚き、御宝前の前にいる自分に、運命的なものを感じたものでした。あれから十年経ちました。ご縁は果てしなく続いていくようで、友近さん、樋口さんには、今も有難いご指導をいただいております。

入信以来、朝晩の御題目口唱を日課とするようになった私は、御宝前のお陰をいただき、崩壊寸前だった会社を立ち直らせることができました。そして有難いことに、この奇跡的な御利益を見ていた家族が少しずつご信心に理解を示し、御題目を唱えてくれるようになりました。昨年一月に父が他界し、父親の供養を機に入信した母親など、いまでは私より熱心に朝晩御宝前に向かっております。

昨年は我が家を新築させていただき、京都の仏具屋さんにご案内いただき、友近さんが同行して下さって御戒壇を求め、護持御本尊さま、高祖御尊像さまをお受けさせていただきました。暮れに御戒壇建立の御礼言上と

父の一周忌をお勤めいただいたときには、家内や娘たちがしっかりと御題目を唱える姿に、何よりも有難さを感じました。

たった一度の人生です。一度しかない貴重な人生だからこそ、御題目で徳を積ませていただきながら、「倅(さいわい)」を追い求めていきたいと願っています。

ありがとうございました。

(平成十八年一月八日発表)

千日参詣の功德

第六連合第一本因組 斉坂小枝子

ありがとうございます。

平成十一年の四月始めのことです。私は持田町の会社からバイクで本町へ行き、用事を済ませて松山地方気象台の所まで戻ってきておりました。ところが気が付くと、奥島病院で車椅子に座っていたのです。一瞬、何が起きたのか、さっぱり分かりませんでした。

事情が分からず、困惑する私に、そばにいた中学生くらいの男の子が「すみません。僕が飛び出してしまいました」と心配そうに覗き込んで、頭を下げました。その言葉で、私は気象台の所まで帰ってきたときに、右側の路地から何か飛び出てきたことを思い出しました。しかしその後のことは、やはり覚えていません。そんな私に看護師さんが、「気が付かれましたね」と声をかけてくださり、診察室に案内してくれました。

先生の前にはCTで撮った写真が並んでいました。先生は私に「別に心配なところはありません。脳震盪を起こしていたのだと思います。明日もう一度来てください」と状態を説明してくれました。確かに私は、手と頬、顎に擦傷をただけで、ほかに痛いところもありませんでした。歩いて大丈夫でしたので、病院の受付から会社へ連絡をしてもらいました。会社の方でも、私の帰りが遅いので、ちょうど心配していたところのようでした。

会社からの迎えを待つ間、待合室で男の子から事故の様子を聞きました。その男の子は松山に来て間もなく、道路の状況も知らないまま自転車を走らせていて飛び出し、バイクに当たってしまったようでした。そして私が気を失っているのに動揺し、どうしようかと思っていると、近所のおばさんが救急車を呼んでくださったことや、親に電話をしたけれど留守だったことなどを、心配そうに話してくれました。見れば男の子のズボン、脛のところが破れています。私が「もう心配せんでいいですよ。そのズボン、駄目になったね」と言うと、「これは中学生のときので、もう高校生になるから大丈夫です」と答えまです。若いのに潔い、責任感の強い子だなと感心しました。

そのうちに社長の奥さまと、同僚が駆け付けてくれました。やがて警察の方が来て、彼はパトカーで、私は会社の車で事故現場へ行きました。

現場検証のあと、警官が事故の状況を説明してくれました。交差点の手前には、よく見ないとわから

ないような黒い跡がありました。警官はそれを指差して、「ブレーキ痕がここに 있습니다。速度が落ちていたから、この位で済んだのですよ。以後気をつけてください」と言われ、特にお咎めもなく帰っていかれました。

私のバイクは、倒れたときに前カゴがへこんだだけでしたが、自転車は前のタイヤが歪んで、乗れる状態ではありませんでした。そこで近くの自転車屋さんを教えてあげると、男の子は何度もお礼を言って、自転車を押して行きました。

私がタクシーで家に帰ると、主人がびっくりしていました。バイクの私が被害者で、自転車の男の子が加害者などとは思いませんので、私が自転車と接触事故をしたという連絡を受けたときには、ほんとうに心配したようでした。そんな主人の様子を見て、私はたいへんなお計らいをいただいたことに気がきました。確かに彼のズボンの傷を思い出すと、事によっては彼の足を折っていたかも知れません。普通なら、彼の方が救急車に乗っていても不思議はないのですから、そう考えるとゾッとしました。ですから夜になって、男の子の母親から「お見舞に伺いたい」との電話がありましたときにも、私は息子さんが無事でよかったことを伝えて、「お見舞はお気持だけ有難くいただきます」とお断りをしました。

その晩は、御宝前さまに護っていただいたことを感謝して、主人と二人でお礼のお看経をしました。翌朝も別に痛むところはありませんでしたので、いつもの通り朝参詣し、お礼の気持ちを込めてお看経をしました。

私たち夫婦は、平成五年に主人が定年を迎えたのを期に二人で朝参詣をさせていただくようになり、平成十年に千日参詣運動が始まってからは、それを励みに日参に努めております。あの事故があったのは、ちょうど千日参詣の一年目を目前にした頃でしたので、つくづく日々の朝参詣の功德をいただいたことを実感したものでした。

御法門では、「怠らずつとむる口唱其しるし かならずことにふれてあらはる」と教えていただきます。これからもいつも御法のご加護がいただけますよう、朝参詣に、口唱に努めたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年一月十五日発表)

自宅で初御講奉修の喜び

第七連合第三事行組 高橋正文

ありがとうございます。

本年一月八日、私の所属する第三事行組の初御講を自宅で奉修させていただきました。こうして自宅に御導師さまを迎え、開講百五十年の新年の御講をお勤めできたことを思うとき、ほんとうに有難い気持ちでいっぱいであります。

今思い起こせば、六十歳を迎えた現在に至る五十代後半の四～五年は、人生のあらゆる経験とまでは

大袈裟かもしれませんが、次々と色々なことが起こりました。

息子の結婚、娘の出産、父親の他界……。会社を辞めて、自分一人で仕事の再出発もしました。さらには今回初御講を勤めた我が家への転居に至るまで、私の今までの穏やかな人生が一転し、実に様々なことを体験することになったのです。

父親が亡くなった後、JR西日本・福知山線の脱線事故がありました。テレビの実況や遺族へのインタビューなどを見ては父親を思い出し、私は涙が出て仕方がありませんでした。なぜなら、その頃の私は自分の身の上に遺族の悲しみを重ね合わせ、「人生、何があるか分からない」と、つくづく不幸を共感させられていたのです。

会社のことも、バブルの崩壊等色々あって経営が軌道に乗らず、この際すっきりとした形で一人で再出発することになりました。自分の年齢的なことも考えあわせると、還暦を目前にした独立には大きな不安もありました。しかし、「このままではいけない」という自分への葛藤と、将来への不安が勝った結果の選択でしたので、心機一転とは思いながらも、絶えず悲壮感が付いてきました。

そんな中で、初めて自分の家を持つことになりました。今まで私は、サラリーマンだった父親の社宅で育ち、学生時代は寮生活。就職してからも会社の寮で暮らしていました。松山に帰ってからは両親の家に同居しておりましたから、「自分の家」という感覚を、これまで持ったことがありませんでした。そんな私が、仕事を一人で始めるのをきっかけに、住まいを探すことになるのです。

家探しを始めて間もなく、不動産屋から「売り急いでいる空家がある」との連絡がありました。それまでも家内と家を探していましたが、なかなか「これは」という物件が見つからず、「何をやっても上手くいかない」と焦っていたときでしたので、これ幸いと早速契約を交わし、今の住まいを得ることができました。

慌しい契約でしたし、予算的なこともありましたので、当初は「これで良かったのだろうか」と考えたこともありました。しかし、初御講の席で御導師さまにも申し上げたことですが、家というものは、そこに実際生活してみて初めてほんとうの我が家になるものです。いい家を授かったと、実感しているこの頃です。

そんな破天荒な「人生の転機」の最中に、長女が出産しました。初めて孫という存在ができた私は、これまでの考え方がガラッと変わりました。というものは今まで、小さな子供は手間ばかりかかって、「こんなにたいへんなものはない」と思っていたのです。ところが実際に孫を抱いて思うのは、「世の中にこんなにかわいい存在があるとは思ってもよらなかった」というのが正直なところ。親馬鹿を通り越して爺馬鹿になりそうです。同時によそさまの子供さんに対する見方も変わってきました。そして長男の結婚という、ある意味幸せなことを続けて経験させていただくことになり、二人の子供の成長を見ながら、身近に素晴らしい幸せがあったことに気付かせていただくのです。

世の人を何げなく見ていると、いつもニコニコとなんの不自由も問題も抱えていないように見えても、実はその人それぞれに大変な思いをしながら生活しているのだと、自分の経験から考えるようにもなりました。そして自分を振り返ったとき、いつでも御宝前さまが見護ってくださっていたことを実感し、自宅で初御講が勤められるまでにお導きくださったことに、心から感謝をさせていただいたのです。

仕事をして家族を養い、子供を一人前に育て上げ、自分の家を構えるまでに成れたのも、思えば御法

のお陰です。私は子供の頃から両親に連れられて、お寺や御講に参詣をしていました。学生時代は名古屋のお寺でお世話になり、青年会活動を学びました。今こうして松山に帰り、皆さまに助けられて第七連合の連合長のお役を授かり、ご奉公させていただくこれまでの私の人生が、すべて私の糧となり、知らず知らずのうちに御利益をいただいていたのだと、つくづく思わせていただきました。

初御講を無事に勤めさせていただいた日、「御宝前さまのお導きがあればこそ、今日の日がある」と悦ばせていただきましたので、その喜びを体験発表とさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十八年一月二十二日発表)

あわや全身不随の重症に……

第八連合第二信要組 大西めぐみ

ありがとうございます。

大学生の息子・祥久がいただいた御利益をご披露させていただきます。

昨年八月十七日のことです。夏休みで高知から帰省しておりました息子は、友だちと双海町シーサイドパークに泳ぎに行っておりました。その息子から電話があったのは、午後四時を過ぎる頃でした。

聞くと、少し沖合いにある人工の島から飛び込んだとき、角度が悪くて斜めにならず、そのまま真下の岩に頭をぶつけたようでした。右肩が痛く、首が曲げられない状態で、右足も麻痺しておりましたが、本人は「それほどたいしたことはないだろう」と考えていたようです。肩の脱臼か鎖骨の骨折と思うので、そのまま友だちの車で松山まで帰るとのことでした。

岩場に頭から飛び込んで、首も曲がらない状態と聞いて、私は驚きました。もう夕方でしたので、松山に着くころには大きな病院は診療時間が終わります。私は急いでその日の救急指定の病院を調べ、折り返し息子に電話をして、日赤に行くように言いました。

日赤で診察をしていただいた息子は、頸椎の六番目の骨を骨折していることが分かり、そのまま入院することになりました。ところが翌日には状態が悪くなり、身体を動かすこともできなくなりました。トイレもベッドでしなければならぬ重症で、息子はパニック状態になりました。腕を突き上げて何かを掴むような動作をしたり、起き上がろうとして叫びます。私はこのまま、息子が寝たきりの状態になるのではないかと思い、ハラハラしながら付き添っておりました。

入院二日目に頭蓋骨に穴を空け、そこにビスで輪っかを付けて、身体に着けたベストと頭を棒で結んで固定する「ハローベスト」という器具を装着してからは、少し気分も落ち着いたようでした。首は固定されて動きませんが、ベッドで起き上がったり、車椅子でトイレに行くこともできるようになりました。結局息子は、そんな器具を付けたまま、十月九日まで入院することになるのです。

入院して間もなく、私は朝参詣を始め、お寺でお供水をいただいてから病院に通うようになりました。状態は落ち着いたと言っても、入院当初に先生から、「もう一センチずれていたら、首から下が麻痺し

ていましたよ」と言われた重症でしたし、骨折のときに六番目の骨がずれていましたので、その手術をする予定もありました。何とか元気に退院できることを、私は御法さまにお願いさせていただきました。毎朝お寺でご祈願があがり、皆さんが息子のために御題目を唱えてくださることが、私の心を励ましてくれました。

お陰さまで二ヶ月近い入院のあと、息子は元気に家に帰ることができました。「最初に頭を打ったときがひどかったので、今すぐ高知に帰るには不安が残る」という先生のご指示で、一ヶ月半ほど自宅療養をしましたが、今は学業に復帰をしております。

今思うと、息子は今回の大怪我の中で、数々の御利益をいただきました。岩場に頭から飛び込んで、命があったのは御利益です。大事な神経がたくさん通う頸椎を損傷しながら、今のところ麻痺も後遺症もなく生活ができています。経過が良かったので、手術もせずに済みました。また、事故のあった日の救急指定がお寺に近い日赤でしたので、私が朝参詣をしてお供水さんを届けることができました。その日赤には脊髄専門のお医者さんがいらっしゃり、万全の治療をしていただくこともできました。

私たち家族は仕事に追われ、充分なご奉公はできておりませんが、義母(はは)が熱心にご信心に励み、朝晩家族の無事を願ってお看経をしてくれますので、今回のそんな数々の御利益は、義母の功德に護られたのだとつくづく思います。

義母が入信を勧めると、息子は素直に受けました。息子なりに今回の事故で、何か感じるものがあったのだと思います。まだ学生で、親元を離れて高知に居りますので、充分なご信心を教えることができませんが、これから信者として育ててもらわなければなりません。そのためにも、まず私がご信心を改良し、ご奉公に励ませていただこうと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年一月二十九日発表)

薫化会、ありがとう

第九連合第一妙唱組 新山裕樹

ありがとうございます。

薫化会で育てていただいたご信心についてお話したいと思います。

僕は二歳から小学校卒業まで高松市に住んでいて、高松妙泉寺に所属していました。薫化会お講は、松風寺と同じで月に一回行われていました。三十分ほどのお講が奉修された後、ゲームをしたり、公園へお弁当を持って行って、お父さんたちと野球をしたり、また、会長さんは釣りが好きだったので、よく海へ釣りに連れて行ってくださったりしました。

五歳のときに四国布教区の第一回サマーキャンプが行われ、一回目から毎年参加をしています。年に三回奉修されるお会式のご奉公や、夏期参詣、寒参詣、百日参詣、バスを借りての他寺院参詣など、楽しく、時にはみんなで競い合ったり励ましたりしながら、知らず知らずのうちにご信心の生活が身につ

いていったのだと思います。

小学校五年生の夏、中村宝泉寺のお会式参詣に、薫化会でお参りさせていただいたことがありました。帰りに四万十川の旧学舎で一泊して、四万十川の自然を満喫して帰りました。自然の中での感動をそのまま持ち帰り、夏休みの読書感想文の中で、僕が見てきた四万十川と自然環境について思うことを書いたところ、高松市から表彰されました。そのことを一番にお寺のご宝前と、小野山御導師に報告したいと思い、お寺にお参りをしました。

お寺には、薫化会の友人が来ていました。当時中学生だった友人は、学校でいじめにあって困っていたのですが、小野山御導師に相談をされて、学校にも懐中ご本尊を身に付けて行くようにしていたのです。するといじめの現場を教頭先生に見つけていただき、きちんと話をさせていただいて、それ以来いじめられることがなくなったという御利益をいただいて、やはりお寺にお参りされていたのです。僕は自分のことを忘れて、一緒に喜びました。

また、薫化会の友人のお祖父さんが危篤になったときに、友人のお宅へみんなで行って、お助行をさせていただいたこともありました。会長さんの後ろに座って、本当に元気になって欲しいと思い、一生懸命お題目をあげました。

薫化会では、会員の家族まで本当の家族のようでした。病気になればご祈願していただき、よくなればご宝前にお礼言上。水泳の大会に出ると言っただけでのご祈願していただき、優勝するとお礼言上をしていただきました。中学受験のときもそうでした。つらいことも、嬉しいことも、みんなでお題目をお唱えして励ましたり、喜んだりしていたと思います。

中学入学からは松山にご縁があり、松風寺の薫化会で活動をしています。特に休日の朝参詣やお会式などで、法鼓のご奉公をさせていただいていますが、初めてお会式で叩かせていただいたのは小学校二年生のときでした。難しく辛かったことをよく覚えています。しかし、当時薫化会のお世話をされていた近藤伸也さんが熱心に指導してくださり、そのお陰で、今は祖父である松風寺の御導師のご法門や、お会式の御導師方の御法門を、一番前で聞かせていただくことができます。

もうすぐ中学を卒業しますから、薫化会では最年長者です。僕が薫化会を通して、ご信心の大切さを知っていったように、薫化会に来ているみんなにも知って欲しいと思っています。お題目と共に自分を高めていく喜びも、たくさん経験して欲しいし、周囲の人たちの支えがあることを感じて欲しいと思います。

法鼓を習いたい人は、僕が教えていただいたときのように、僕の横に座って一緒に叩いて欲しいと思います。また、学校で困った事があつたり、何かに挑戦しようかどうかどうしようかと迷っている人がいたら、一緒にお題目をお唱えしたいと思います。

そして僕自身も、お題目の力をお借りして、より大きな目標に挑戦したいと思っています。

ありがとうございました。

(平成十八年二月五日発表)

いつも一緒に御題目を唱えてくれる教化親さん

第十連合第一大歓組 佐賀 恵

ありがとうございます。

私が本門佛立宗のご信心を始めて、今年で四十三年になります。三十九歳のとき、十二指腸潰瘍の手術をしたのですが、一向に快復せずしばらくしていた私のところに近所の矢野シズカさんが訪ねてこられ、ご信心を勧めてくださったのです。近所とは言いながら、普段はあまり話したこともなかったのですが、その日から矢野さんは、毎日のように私にご信心を勧めに来られました。

最初は「信仰なんて、とてもとても」と思っていた私ですが、十日目頃に「一週間でいいからお助行を受けてみなさい」と言われ、そのときの矢野さんの真剣な眼差しと態度に、「私のためにここまで心配してくれている人がいるんだ」と心を打たれてお助行をいただくことにしました。

お助行を受けることになった私に、矢野さんは「お助行が始まるまでに、皆さんと一緒にちゃんと御題目がお唱えできるようになりましょう」と言われて、朝早くから家に来て、一緒に御題目を唱えてくれました。また、皆さんが帰られた後も一緒になって、御題目をあげてくれました。と言うのも私は最初、なかなかうまく唱えられず、「もっと真剣にお唱えしなさい」と毎日叱られるような状態だったのです。

一週間目の朝、家の前の泉で、「今日はいまよくお唱えできますように」と身を清めて臨んだら、矢野さんに初めて「よくできた」と褒めてもらうことができました。そして「お看経ができるようになれば、もう大丈夫だから仕事に行きなさい」とも言われました。ところが私は翌日も不安で、「やはり病院に行こう」と思って家を出ました。しかし途中で矢野さんの言葉を思い出し、引き返して仕事に出ました。それからはほとんど休むことなく、今日まで元気に勤めております。

御題目にお出値いしてからの私は、たびたび御法のお計らいをいただきました。その中でも、命に関わる幾つかの御利益を發表させていただきます。

入信後二十年程した頃のことです。私はいつも、日曜日には健康目的で山を走っておりました。ある日、崖をよじ登り、伸ばした右手で草を握ったと思った瞬間、チクッとした痛みを感じました。痛みはだんだんひどくなりましたので、何か悪い虫にでも刺されたのかと思い、私は指を噛んだまま山を降りました。松山の病院で診てもらい、治療を受けましたが、一向に痛みは取れず、腫れも引きません。そのうち、噛まれた指の腫れは徐々に腕全体に広がっていきました。

医者に相談しても、「そのうち薬が効くから」と言って取り合ってくれません。私は「おかしいなあ」と思いながら、自分で車を運転することも出来なくなっていましたので、近くの喫茶店で休んで帰ることにしました。すると店の奥さんが腫れた私の手を見て、「これは蝮に噛まれたのと違いますか。私は去年、蝮に噛まれた人を見てよく知っているけど、間違いのないから早く別の病院に行きなさい」と言ってタクシーを呼んでくれ、私は言われるままに外科病院に行きました。

病院では副院長先生がたまたま通り掛かり、私の手を見て「これは大変だ」と言ってすぐに手術をし、血清を打ってくれました。しかし噛まれてから随分時間が経っていたこともあり、痛みと腫れは増すばかりで、背中まで水膨れのような腫れが広がって、三日後に再手術をすることになりました。それから

二～三日は意識もなかったようですが、徐々に回復し、数日後には元気に退院することができました。

後になって思えば、あのとき、もしそのまま家に帰っていたら、私は間違いなく命を落としていたでしょう。偶然立ち寄った喫茶店の奥さんが、蝮に噛まれた状態をよく知っていたお陰で、私は一命を取り留めることができたのです。これは御法門で聴聞させていただく「変化の菩薩」に助けていただいたのだと思い、御宝前さまに御礼を申し上げたものでした。

その翌年の十二月二日にも、松山沖の中島に仲間と狩猟に行ったときに、大きなお計らいをいただきました。と言うのも山に入って間もなく、仲間が誤って撃った散弾銃の弾が私に当たったのです。私は一瞬、気を失ったようです。気が付いたときには「大変なことになった」と思いましたが、そのときはまったく痛みを感じず、「警察に連絡して欲しい」と頼むことも出来ました。

ところが背負われて山を降りる頃になって、譬えようなない痛みが身体を走りだし、生きた心地がなくなりました。夢中で御題目を唱える私を、手配された海上タクシーが三津浜の病院に搬送しました。そして多量の輸血を受けながら七十五粒の散弾銃の弾を取り出してもらい、私は一命を取り留めたのです。ちなみにこのことはテレビのニュースにも流れ、親戚知人等を驚かせたようでした。

実はこのとき、相手の銃の角度がほんの少しでも上を向いていたら、心臓や頭部を損傷して命を落とすか、大変な後遺症に苦しむところでした。しかし、当たった場所が幸いお腹の下でしたので、私は助かったのです。そしてこのときも、私は何か目に見えないお護りのあることを強く感じました。

さらにそれから十六年後の八月十二日のことです。私は農業に励んでおりました。稲に農薬を散布した後、夜になって四十度の熱が出たので、病院で診察をしてもらいました。すると農薬散布の影響でMRAぶどう球菌に冒され、肺炎を起こしていると診断されました。私はそのまま入院しましたが、その晩は四十度八分も熱が出て、意識がもうろうとしていました。そして混濁した意識の中で、私はすでに亡くなられた教化親の矢野さんと、入信したあの頃のように一緒に御題目をお唱えしておりました。いつも私を心配し、夢の中にまで出てきて一緒に御題目を唱えてくれる矢野さんを、心から有難く思いました。このときは二か月入院をしましたが、矢野さんのお陰もあって無事に退院することができました。

私は現在、八十三歳になりますが、元気に農業を楽しんでいます。これまでの自分の人生を振り返り、命に及ぶ大きな難に二度三度と遇いましたが、無事に乗り切ってこれたのはご信心のお陰と感じております。そして、このご信心を勧めてくれた矢野シズカさんに、心から感謝をいたしております。今でも矢野さんのことを思い出すと、私は胸がいっぱいになります。

私のご信心は、そんな素晴らしい教化親には及びませんが、これからも矢野さんのご信心を目指して頑張りたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年二月十一日発表)

お祖師さまのお使い

ありがとうございます。

広島県の呉で育った私が、働きに出てきた松山に暮らしはじめたのは、二十五歳の頃でした。当時は道後の駅の辺りは大きな池で、そこに真宗の説教所があり、松山に来たばかりの私は、両親の命日ごとにそこへ通っておりました。

そんな私にある日、同じ職場の友人・住家さんが、「どこへ行くん？」と声をかけてくれ、「両親のご回向をするなら、いいお寺を紹介してあげる」と言って松風寺に連れてきてくれました。その頃の松風寺はまだ木造の旧本堂で、古い納骨堂もありませんでした。私は、「小さなお寺だなあ」と思いましたが、仏教は皆同じで、宗旨の違いがあるとは知りませんでしたので、そのまま教えられた通りに御題目を唱え、お参詣をするようになりました。松山での数少ない友人が誘ってくれたお寺でしたので、安心感もありました。ですから、私はいつ入信をしたのか記憶がありません。気がつけば松風寺の信者として、ご奉公をさせていただくようになっておりました。

こんなに簡単に宗旨替えをしたものですから、実家の兄が心配し、「どんな信仰か」と尋ねてきました。しかし、私の話を聞いて、「創価学会でないならかまわない」と言ってくれました。それからは住家さんや奥山さんが、私にご信心を教えてくれました。戦後の貧しい時代でしたが、皆さん熱心にご奉公され、楽しい毎日でした。私は教えられた通りにご参詣やご奉公に努め、それから早くも五十年が過ぎました。ご信心のお陰で、私はその間に数々の御利益をいただきましたが、今日はお祖師さまが護ってくださることを強く感じた体験をお話しさせていただきます。

平成十六年のことです。その日、私はいつものように夕方のお看経をしておりました。すると、普段は訪ねてこないご信者さんがひょっこり家に来られ、私がお看経をしているのを見て、いっしょに御題目を唱え始めたのです。普段は熱心なご信者ではありませんし、お看経もあまり好きではない方ですので、「珍しいこともあるものだ」と思いながら、しばらく二人でお看経をしておりました。

すると突然、私の右手が痺れ始めました。すぐに治まるかと思いましたが、どうにもなりません。「おかしいなあ」と思っておりましたら、そのご信者が「病院に行こう」と言いました。そのとき私は、お医者さんにかかるほどのことでもないと思いましたが、あまり熱心に勧めるものですから私もその気になり、タクシーを呼んで病院に行きました。

連れて行ってもらったのは、そのご信者の家の近所の貞本病院でした。土曜日の午後でしたので、待合室はいっぱいでした。やがて順番が回ってきて、私は診察をしていただきました。お医者さんの診断は「脳梗塞」で、私はそのまま入院することになりました。びっくりしました。それからの数日は、朝晩点滴をしていた記憶だけで、あまりはっきり覚えておりません。

無事に退院してからは、今日まで毎日、元気に朝参詣や御講参詣を続けております。入院してからは物覚えが悪くなり、昨日のことも忘れることがありますが、お陰さまで身体の方は元気です。

しかし、考えても不思議です。私が脳梗塞を起こしても元気で参詣できるのは、手当が早かったからですが、これは普段、滅多に家に来ることのないご信者が、訪ねてきてくれたお陰でした。しかもお看経が好きではないその人が、珍しく私とお看経をしてくれました。一人で居れば病院には行かなかったでしょうが、熱心にお医者さんに診てもらおうことも勧めてくれました。しかも連れて行ってくれたの

は、彼女の家の近所の、脳外科の専門病院でした。これはどう考えても、御法さまが脳外科の近所のご信者をお使いにして、私が倒れる前に護ってくださったようにしか考えられません。脳梗塞のあと、手当が遅れて後遺症に苦しむ人も多い中で、ほんとうにお陰をいただくことができた感謝をしています。

私は大きなご奉公はできませんが、朝参詣と御講参詣、朝晩のお看経は五十年間しっかり勤め、近所のご信者さんのお世話もコツコツとご奉公させていただきました。このたびの御利益は、そんなご奉公の積み重ねで頂戴したのだと思います。

真面目にご奉公に勤めれば、お祖師さまは必ずお護りをくださいます。

ありがとうございました。

(平成十八年二月十八日発表)

死地で感じた御法のお計らい

第二連合第二堅信組 松窪秀雄

ありがとうございます。

戦時中のお話しです。徴兵を受けた私は、ご老尊・日崇上人のもとへご挨拶に上がり、懐中御本尊さまを認めていただきました。ご老尊が私をジッと見詰めて、「毎日御題目をお唱えして、元気で生きて帰れよ」とお言葉をくださった日を、今もはっきりと覚えています。

昭和二十年二月十五日、旧満州国に駐屯する関東軍の要員として、私は高知県の朝倉隊に参加しました。健康診断や検査を終えて、十日後の夜中には軍用列車で極秘に出発したのですが、広島駅の近くで流行性脳膜炎が発生し、衛生兵からマスクを渡されました。それからは戦力保持のため、初年兵は古兵と隔離されての移動となり、悶々とした空気の中で二月末に旧ソ連との国境の街、東安に着くのです。そこは、広い河の向こう岸がソ連軍の陣地で、晴れた日には人影も見える危険地帯でした。

一週間程で隔離が解除され、兵器を受領しました。私は軽機関銃の受け持ちとなり、しかも射手になりました。古兵を含む四名で装備を運ぶのですが、軽機関銃は小銃の三倍も重量があり、肩に食い込みます。辛い訓練でした。

講義や訓練がだんだん厳しくなり、射撃実習が始まって、「私はいよいよだな」と覚悟しました。激戦は必至ですから、無事は望めません。故郷を遠く離れた場所で死ぬのは心残りでしたが、就寝前に御題目を唱えながら、寂光参詣してご信者仲間と再会できますよう真剣に祈ったものでした。

ところがしばらくして、大隊本部から公役兵を出すよう要請があり、古兵が毎日出かけるようになりました。やがて古兵の密談を耳にし、私たちの部隊は本土防衛のために出動準備中であることを知りました。再び本土に帰れるとは思っていませんでしたので、私の思いが御法さまに通じたのかと喜びました。

四月半ばになって、私たちは貨車で釜山へ出、貨物船で敦賀港へ戻りました。そして高知県の仁淀川河口へ配属され、宇佐地区で陣地の構築を始めるのです。

辛い作業でした。山根の岩盤を掘り進むのですが、岩が堅くて工事は進みません。ツルハシを打ち込むと火花が出ます。「鬼」と仇名される班長は、「気力が足りん」と言って兵士を殴りますが、二メートルから先は工事が進まないのです。見かねた班長が作業兵からツルハシを取り上げ、懸命に岩盤に立ち向かいました。班長に疲れが見えても、兵士たちは萎縮してジッと見ているだけです。見かねた私が「代ります」と声をかけると、班長は道具を置いて「並べっ！」と怒鳴りました。振り上げたコブシが私の頬に炸裂しました。この理不尽な行為も、戦時下で感覚が麻痺していたのでしょう。私は「これが軍隊なんだ」「いや、実践はこれでは済まないんだ」と自分に言い聞かせたものでした。

数日後、班長が「貴様と機関銃の分解・点検をする。午後の作業を代わるように」と言ってきました。鬼の班長の優しさを感じ、「これも御法のお計らい」と、懐中御本尊さまに御礼を申し上げました。そしてその後、私たちは別の場所を選びなおして、陣地の構築作業をすることにもなりました。

そんなある日、私たちを予期せぬ出来事が襲いました。終戦の公報でした。その日から、それまで親切にしてくれていた地域住民たちの目が、突然冷たいものになりました。作業も中止になり、不安な時間が過ぎました。終戦の広報から三日目の朝、班長が「小隊長から命令書が届いた」と告げました。それは、「治安維持のための臨時憲兵として、善通寺憲兵隊への入隊を命ずる」という、有難くない内容でした。班内は除隊後の話で持ち切りでしたので、「なぜ自分が……」と思いましたが、「私にはまだ、日本のための残された仕事があるんだ」と意を決し、命令を受けました。

善通寺に着いて五日目頃だったと思います。アメリカの軍司令部より、「臨時憲兵は認められない」との通達があり、私たちは直ちに解散になりました。お陰で私は、本体の兵隊よりもずっと早く、家に帰ることができたのです。

戦後、ソ連の参戦で関東軍が壊滅したことや、旧満州の惨状、また本土決戦の場となって多数の死者を出した沖縄の様子を耳にし、私は何と巡り合わせ良く、死地を逃れてきたのかと驚きました。多くの復員兵が食べ物もなく、何年もかけて日本に戻った中で、戦後すぐに帰宅できたのも大きな幸運でした。そしてこれらは、出征前にご老尊が認めてくださった懐中御本尊さまを、肌身離さずお持ちさせていただいたお陰と、ほんとうに有難く思ったものです。

ご老尊に「生きて帰ってこい」とお言葉をいただいて、ちょうど六十一年になりますが、今も当時のことを鮮明に覚えているのは、戦争がそれだけ異常体験だったためでしょう。死と隣り合わせにならざるを得ない状況で、私は一日を無事に過ごす有難さや、御法のお計らいをいただいていることを、実感できるようになれのかも知れません。しかし戦争は、絶対にあってはならないことだと体験者として強く思います。今も世界の各地で武器が作られ、紛争が絶えませんが、世界平和を願って口唱に勤めたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年二月二十六日発表)

ありがとうございます。

最近、人のやさしさや温かさを、しみじみ感じております。皆さんから「よくご奉公ができるね。感心するわ」と声をかけられますが、私のご奉公は、多くの支えをいただいて勤まっていることを、強く実感するのです。

毎日の朝参詣は、山本ショブ代さんのお孫さん、窪池みゆきちゃんが、毎朝きちんと車で迎えに来てくれるお陰です。若いから夜の遅いこともあるでしょうに、山本さん、窪池さん一家の温かい気持ちのお陰で、千日参詣運動も二千四百日を迎えることができました。

婦人会のお役も、声をかけると気持ちよくご奉公くださる方たちのお陰で無事に務めております。帰りが遅くなると、車のある方が声をかけてくれます。異体同心の力を感じ、ほんとうに有難く思っております。

さて、今日はそんな私が、お看経を怠けてお叱りをいただき、御法さまの大きな支えを感じた体験をお話しさせていただきます。

昨年の秋、青年教務会の十一名の御講師方が、愛媛県内のお寺を巡回するため松風寺に宿泊されました。明日から三日間、朝食のご奉公をさせていただくというその前の晩のことです。私は腰から左足全体に、突然ビリビリと強い痛みを感じたのです。

元気が取柄の私ですから、こんなことは初めてです。シップを貼っても余計に痛み、寝ることもできません。夜中でしたがお風呂を沸かし、身体を温めてみましたが治りません。御法さまに助けていただくよう御宝前に座るのですが、座ることも、御題目をお唱えすることもできない状態でした。

ちょうど私が、翌朝の朝食の材料を預かっていましたので、どうしてもご参詣させていただかなければなりません。それを思うと、涙が出てくるばかりでした。横になっても、痛みで十分おきに眠りが覚める繰り返しでした。しかし、不思議なことに、朝になると痛みは止まっておりました。「ああ、良かった。ご奉公がさせていただける」と喜び、いつものように御宝前のお給仕をさせていただいて御礼を申し上げ、朝参詣をさせていただきました。

初日の朝食のご奉公も、こうして無事に務めることができたのですが、晩になるとまた痛みが襲ってきました。私は「もう、どんなになってもええ」と思い、痛む足で正座して、夜中にお線香一本のお看経をさせていただきました。お陰で二日目も朝になって痛みが治まり、またご奉公をさせていただくことができました。

その日のご奉公を終えて、私は病院で診てもらいました。すると先生から「坐骨神経痛です。なかなか治らないよ」と言われてしまいました。先生の言われた通り、その晩も激しい痛みに苦しみました。こんなことが毎日続くのかと思うと憂鬱になり、夜になるのが怖いと思いました。

ところが三日間のご奉公を終えると、なかなか治らないはずの痛みがピタッと止まったのです。なんで大事な三日間だけ痛んだのかと不思議に思い、そして私は気が付きました。これは御法さまからのお折伏でした。

その頃、私はご奉公が忙しく、少し疲れもありましたので、信者の大事な勤めを忘れ、家の御宝前でのお看経が出来ておりませんでした。御法さまはそのことを、私に教えてくださったのだと思います。

ですからご奉公のある時間は痛みが止まり、晩になると、「早く思い出せ」と教えてくださったのでしよう。そのことに気付いたとき、ほんとうに生きてまします御法さまにも、私のご奉公は支えられているんだなあと有難く思いました。

それからの私は、御法さまや皆さんの支えをいただきながら、毎日ご奉公のできる自分を強く感じるようになりました。今、私は「人」という字をつくづく感じます。一人では何もできないけれど、こうして支え合い、寄り添っているから力が出るんだなあと思うのです。

これからも心やさしく人を敬い、ご信心を専一にして、皆様と一緒に精一杯のご奉公に頑張っていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年二月五日発表)

無事息災の六十年

第四連合第三長寿組 山田民雄

ありがとうございます。

私のご信心をさせていただくようになって、早六十年になろうとしています。そんな自分の人生を振り返り、毎日元氣にご参詣のできる有難さを、皆様にご披露させていただきたいと思えます。

私の両親は、叔父の山田峰松の勧めでこのご信心を始めました。当時叔父は、ご信心の有難さを親戚一同に語って聞かせ、そのほとんどを入信させておりました。両親もそんな中で、御題目のご縁をいただいたのです。

私の青春時代は第二次大戦中で、私も十八歳のときに入隊し、終戦のときには台湾のレーダー基地で任務に当たっておりました。そしてそのまま、蒋介石の軍隊の捕虜となるのです。

捕虜と言っても、通信機器の使い方を指導したりして、わりと安気にしていました。ところがマラリアが大流行して、戦友たちが随分この病気で命を落としました。高雄の部隊には、何千人もが所属していましたが、戦死した者は誰一人おりません。それなのに、マラリアに罹って大勢が亡くなったのです。私もマラリアに冒されましたが命拾いをして、翌年の三月には日本に帰国することができました。

帰国して間もなく、私はマラリアを再発し、高熱にうなされる日が続きました。そんな私のために、母は御宝前さまにご祈願をしてくれました。お陰で熱が引き、体力も快復していきましたが、母のご祈願を知らない私は、当初「運よく命拾いをした」ぐらいに思っておりました。しかし後になって、母の必死のご祈願の様子を聞かされ、「お陰をいただいたのだ」と有難く思わせていただいたものでした。

なぜなら、高雄で多くの仲間の死を見てきた私は、この病気の怖さを身に染みて知っておりました。ですから「叔父が熱心に語っていた御題目の力で、死の淵から無事に戻れたのに違いない」と、素直に思うことができたのです。そしてこの体験が、私をご信心へと導いてくれたように思います。

叔父の折伏は厳しいものでした。帰還を果たした私のところに来て、「有難い菩薩行だから、おまえ

もしなさい」と、それはとても強引に言いました。病が癒えた私は、言われるままにご信心を始めるのですが、家内は文句一つ言わずに黙ってついてきてくれ、ほんとうに感謝をしています。

私の今日までのご信心と言いましても、特に大きなお役を受けてのご奉公はできませんでしたので、教わったことを地道に積み重ねることだけを心がけてきました。

朝参詣や御講参詣、他寺院の御会式参詣と、とにかくご参詣には励みました。お陰で子供が高校に上がるまでは、県内のお寺の御会式には必ず親子五人でご参詣させていただくなど、家族がご信心を中心に生活できるようにもなりました。

家族を見守ってくださる自宅の御宝前のご荘厳も、精一杯させていただき、朝晩の口唱も怠らずに勤めました。御有志の話があれば、出来る限りの功德が積めるよう努力をしました。

そして一生懸命働きました。お陰で見よう見真似で始めた電気屋でしたが、日本の経済復興の波に乗り、電気洗濯機やテレビ、電気冷蔵庫など次々とヒット商品が出て、忙しい思いをしました。家内にお金の心配をさせることなく、健康で稼がせていただきましたが、仕事が繁盛しても自分の才量の中で押さえ、人を雇って事業を拓げるなど余分な欲を出さなかったのは、日々の御法門聴聞の功德によるものと思います。そして今にして思えば、それで良かったのだと思っています。

昭和五十七年までは車の運転をしていましたが、大きな事故をすることもありませんでした。これも御法のお陰とっております。車の運転を止めてからは、自転車での朝参詣を始め、今日に至ります。家はJR松山駅の前にあるのですが、最近はお寺まで要する時間に年齢を感じます。昔は片道十五分ほどでした。もうすぐ八十三歳になる今は、二十五分かかります。一緒に参詣しておられる方も随分と変わりました。時間の経過を感じます。

しかし、こうした長年のご奉公のお陰で、釣仲間からも「おじさんは若いのう」と言われるほど、元気に過ごせる身体の御利益をいただきました。これまで一度も入院もせずにおりますのは、まさに御法さまのお陰以外の何物でもないと感謝をしております。仕事が順調だったのも、事故なく運転してこれたのも、とにかく私はご信心のお陰で、ずっと「毎日無事・健康」の御利益を頂戴してきたのです。

今になって思えば、よく御利益談で聞かせていただく「危機一髪を助けていただいた」とか、「難病を救っていただいた」という体験はありませんでしたが、それにも増す無病息災・現世安穩の御利益をいただき続けた六十年でした。

私は今、これからも身体の続く限り、朝参詣や御講参詣、他寺院の御会式参詣に励ませていただき、何とか子供たちにこの尊いご信心を掴ませたいと願っております。

御法のお陰をいただいて、子供や孫も必死でお縋りするような災難もなく、息災に過ごしているのは有難いのですが、その分まだまだご信心に対する思いがありません。開講百五十年をお迎えた今年、親の責任として、何としても法灯相続を成就させたいと念願をいたしております。

ありがとうございました。

(平成十八年三月十二日発表)

お助行のお伴をしてバンコクへ

第五連合第二本清組 加藤慶一

ありがとうございます。

このたび副導師のお伴をして、タイのバンコクでのお助行を体験させていただきましたのでご披露させていただきます。

平成十六年の十一月上旬頃でしたでしょうか。私の組の吉岡秀明さんが、御導師に「タイの工場に転勤することになりました」とご挨拶され、「赴任が長くなりそうなので、タイは仏教国ですからご弘通に気張ってみます」と言われました。

私たちには、組御講でご披露がありました。突然の話にびっくりしましたが、それから組内で相談し、「吉岡さんが異国で一人でご弘通されるのなら、皆でタイへ行ってお助行をさせていただこう」と話が決まりました。希望者はその場で、六～七人が名乗りをあげました。私たちの組は農家の方も多いので、農閑期の二月頃がいいということになり、早速副導師にタイへ行く手配をお願いしました。吉岡さんが組のご奉公から抜けるのは痛手ですが、そのご弘通への思いに感激し、皆、応援に行くことを楽しみにしていました。

その年末に、吉岡さんはタイへ行かれました。年が明けて、吉岡さんと連絡を取られていた副導師から、「タイは仏教国と言っても日本と様子が随分違うので、吉岡さんは、せっかく皆さんが来てくださるのなら、もう少し日にちをくださいと言われていました。現地に慣れるまで、しばらく待ちましょう」と説明がありました。

私たちは、気を削がれたようで少し残念でしたが、「暮れに行ったばかりだから言葉も分からないでしょうし、知り合いもない所だから無理ですよ」と私たちのせっかちさを反省いたしました。その後、組内で皆と顔を合わすたびに、「吉岡さんは元気で頑張っているかなあ」と話題にしておりました。

昨年暮れ、吉岡さんが正月休みを利用して一年ぶりに帰国しましたので、お正月の初総講のあと、私は副導師や組長の内藤さんと一緒に、吉岡さんからタイの様子を聞きました。吉岡さんは、「何人かご信心の話をしているので、ぜひ来てください」と言われました。私はその場で組内の方と連絡を取り、二月十八日、十九日の土日を中心にタイへ行く予定を決めました。残念ながらその後、同行を予定していた方たちの事情が変わり、副導師のお伴をさせていただくのは最終的に私一人になりました。少々心細い気持ちでしたが、二月十七日の朝、予定通り松山空港から関西空港へと出発しました。

関西空港では、シンガポール航空のラウンジで、バンコク行きの飛行機の時間待ちをしました。このラウンジは、飛行機をよく利用される方専用の休憩所で、コーヒーや洋酒、おつまみなど、すべて無料でいただけます。副導師がよく飛行機に乗られるので、私もこの快適な部屋でお世話になり、ほろ酔い気分でタイへと向かいました。

バンコクの空港までは約六千五百キロの空の旅です。出張用のパックで申込みましたので、バンコクでは現地の旅行社が、空港からホテルまで連れて行ってくれました。ホテルに着いたのは晩の八時を過ぎていましたが、ロビーには吉岡さんと、七連合の武智啓三君が迎えてくれました。武智君は、以前弘通部のご奉公もされていた武智正子さんの長男で、現在は神奈川県で勤めています。タイへの出張が多

いので、事前に副導師が連絡を取られたら、都合良くバンコクへの出張中でした。この偶然には副導師も驚かれたようです。話を聞いて、私は偶然とは思えませんでした。御法さまのお導きです。有難いことと感激しました。

ホテルにチェックインをしたあと、日本流に言えばファミリーレストランのようなタイ料理の店に案内されて、食事をしながら打合せをしました。そのとき、吉岡さんが意外なことを言いました。タイでは閉店時間がくれば、お客さんに関係なく電気を消して、従業員が帰ってしまうそうです。お国柄の違いに驚きました。やがて閉店の時間になりましたので、翌日の待ち合わせ時間を決め、電気が消える前に店を出ました。

翌朝、「時間が少しありますから、外に出てみましょう」と副導師に誘われて、ホテルの周囲を歩きました。タイは純粋な仏教国と思っていましたが、街にはキリスト教の教会もありました。私はそれを見たとき、「これなら吉岡さんの頑張りで、本門佛立宗のお寺が出来るかも知れない」と思いました。

この日は吉岡さんが、夕方まで仕事に出なければならなくなりましたので、それまで武智君が市内を案内してくれました。電車が便利だと言うので駅へ向かい、ここでも驚かされました。タイの電車は時刻表がありません。駅員さんもいなかったように思います。「国が違うといろんなことが違うもんだなあ」と感心しました。

最初に案内されたのは、ウィークエンド・マーケットと呼ばれる市場でした。ものすごく広い敷地にバラック建ての小さなお店が並び、色々な品物が売られています。品物の種類、人の多さ、値段の安さ、そして活気にびっくりしました。思い出に残る商店街でした。

やがて吉岡さんと連絡が取れ、伊勢丹の地下駐車場で待ち合わせて、郊外にある会社の工場へと向かいました。工場は仕事を終えて閑散としていましたが、通された応接室には吉岡さんの職場の仲間が二人、通訳の女性と一緒に待っておられました。最初は三人の予定だったそうですが、一人は残念ながらお休みでした。

副導師が通訳を通して約一時間、タイの仏教と日本の仏教の違いや本門佛立宗の信仰について話され、現証の御利益談もお話しされました。タイの人たちも、話が進む程に穏やかな顔になり、御題目口唱のご信心を理解したようでした。副導師のお話しが終わったあと、吉岡さんは、「大成功です。やはり私が話すより、専門の人にきちんと話していただいたので、彼らも良く聞いていました」と喜ばれました。通訳の方も「勉強になりました」と言われていました。

そのあと、会社の敷地にある小さなお堂に、副導師が日本からお供された御本尊さまを祀り、十五分ほどお看経をさせていただきました。私は、タイでも御題目のご信心が弘まりますようにと、真剣に口唱させていただきました。

工場を出てから、フラワーマーケットや乾物の露天、果物店などを案内してもらいました。タイの印象は、どこもお店が広く、品物も豊富です。吉岡さんは、「とにかく安い」と買い物を勧めてくれましたが、私は買うものがないので見ておりました。それから、日本食のレストランへ連れて行っていただきました。ここには日本酒も置いていましたので、私は白鶴をいただきました。タイで日本酒が飲めるとは思っておらなかったもので、よけいに美味しく感じました。

十九日の日曜の朝、吉岡さんが会社の運転手付のワゴン車で迎えに来てくれ、まず吉岡さんの家に行

きました。広々としたワンルームで、掃除はメイドさんがしてくれるそうです。日本人のビジネスマンが多く、マンションの中にはスーパーや食堂も揃っています。私は、「これなら単身赴任でも不自由しないな」と安心しました。

部屋の御宝前でお助行をしました。ロウソクは黄色で、お線香は中に芯が入った香りの強いタイのものでした。昨日買ったマンゴーがお供えしてありました。

吉岡さんの家でしばらくタイの話聞いたあと、「お寺巡りをしましょう」と言われて出かけました。王宮寺院やエメラルド寺院など、さすがに王様が作ったお寺は立派です。日本と違う色使いの鮮やかさにも感激しました。見るものすべて規模が違い、驚きます。特に、大勢の外国人観光客で賑わう中、各所でお線香やロウソクが灯り、タイの人々が祈りを捧げている姿には心が洗われました。ご信者さんは地べたに靴を脱ぎ、正座して合掌です。そんな真剣なタイの人々の祈る姿にも、勉強させていただきました。

喫茶店で休憩していると、ここでも思いがけない光景に出会いました。私の向いの席でウェイトレスが靴を脱ぎ、両手でコーヒーを捧げて差し出します。見るとそこには、タイのお坊さんたちが座っていました。ウェイトレスはひざまずいたまま、合掌して下がりました。このお坊さんたちへのお給仕の姿には、ほんとうに驚きました。仏さまへも、お坊さんたちへも、とにかくタイの人たちは、心からの敬いの姿で接しています。副導師が、「この国の人は、ああした敬いが身に付いていますから、あとは御題目を唱えることを覚えると、どんどん現証が出ますよ」と言われました。私もそう思いました。

膝の悪い私には、この旅行は少し堪えましたが、最後に私の足を気遣って、吉岡さんがタイ式のフットマッサージの店に案内してくれました。このマッサージはよく効きました。すっかり足が楽になったあと、バンコクの空港まで送ってもらい、握手で吉岡さんと別れました。わずか三日間の滞在でしたが、私はタイでのご弘通のことを思い、「吉岡さんに協力するよう、帰国したら皆に呼びかけよう」と自分に言い聞かせました。

吉岡さんは、今度は七月に帰国するそうです。異国で一人頑張る吉岡さんが、ご弘通の成果を出すには、まだまだ時間がかかるでしょうが、ぜひ皆さんも励ましていただき、応援をしていただきたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十八年三月十九日発表)

お寺の側で暮らす素晴らしさ

第六連合第二本因組 佐野久香

ありがとうございます。

今日は私の娘と姪が、偶然にも二人そろってたまたまお寺の近くに住み、ご信心を覚えることができた話をご披露させていただきます。

平成十六年の春先のことです。私の妹の娘、袖岡愛子が福岡の専門学校を卒業し、「しばらく一人暮らしをしたい」と言って、友人を頼って松山に来ました。住まい探しも友人任せ。仕事も松山に来てから探すと言うので、話を聞いたときには「ずいぶん思い切ったことを……」と驚きもし、心配もしたものでした。

その愛子が、松山に来て初めて会ったとき、更に驚くことを言いました。友人の紹介で決めたマンションに着いて、ベランダの窓を開けると大きな佛丸が見えたと言うのです。そう、愛子が知らずに契約したマンションは、松風寺と道路を挟んだ場所にありました。本人も窓を開けた瞬間にビックリしたようで、すぐに母親に電話をして、お寺の住所を確かめたと言います。

姪の実家は山口県周南市という所で、近くに本門佛立宗のお寺がないため、車で二時間近くもかかる広島県の廣隆寺に所属をしています。母親である私の妹は、熱心な両親にご信心を躰けられた子供の頃からの信者ですが、今はお寺が遠いため、愛子はそれまで年に三度の御会式にご参詣する程度のお寺との関わりでした。それが松山に来た途端に、朝参詣のお看経の音に目覚め、マンションの玄関を出れば信号の先にはお寺の正門が見える場所で生活するようになるとは、本人も周囲もただ驚くだけでした。

心配していた仕事も無事に決まり、愛子の松山での生活が始まりました。そしてそれは、同時に初めてのお寺のご奉公の始まりでもありました。

彼女が最初に体験したのは、四月二十九日の立教開宗記念一万遍口唱会でした。もともと素直な性格ですので、私が誘うと、時間の都合が付く限り組の清掃当番やご供養当番にも出てきて手伝ってくれました。

職に就いたばかりで生活費にゆとりがないため、毎朝お弁当を自分で作って出勤していましたので、朝起きの苦手な愛子には朝参詣が難しかったようですが、それでも夏期参詣や寒参詣には頑張ってお参りをしておりました。青年会の皆さんにもよくしていただいて、御講参詣やご奉公のお手伝いもするようになりました。

本人はそんな生活が結構気に入って、ずっと松山で暮らしたかったようですが、今年の春に結婚が決まり、花嫁修業のために昨年春に実家へ帰りました。嫁ぎ先は長崎県の本門佛立宗のお寺がない場所で、相手も宗外の方ですが、妹の話では愛子が自分からご信心を持って行くと言ってくれ、相手のご家族もそれを了解してくれたそうです。一年前には考えられなかったご信心への気持ちの変化に、私も妹も本当に嬉しく思い、お寺の近くに住むことのできた因縁に感謝をしたものでした。と言うのも、私にも同年代の娘がおりますが、我が家がお寺から遠いこともあって、信心相続はあまり期待できない状態だったのでした。

娘のかおりは七年前に東京の大学に入り、卒業後も東京で塾の講師のアルバイトをしながら暮らしておりました。平成十五年の春、水戸市内の高校に教員の口が見つかり、水戸に引っ越すのですが、マンションは冷暖房の設備もないお粗末なもので、さすがに嫌気が差して昨年春に新築のマンションへと移りました。

新居への引越しが終った娘から、「今度のマンションは、水戸のお寺まで歩いて十五分で行ける」と聞いたときは、ちょうど愛子が松山から実家に帰った頃だったので驚きました。早速娘は水戸の開運寺さんへお参詣し、勝手に分からないので納骨堂に手を合わせて帰ったようでした。間もなく私が水戸の

新居へ行き、娘と一緒に開運寺さんへ参らせていただいて、先方の御導師にご挨拶をさせていただきました。ご信心の躰けを十分にしていない娘のことですから、正直なところ、私はそれで終ると思っておりました。

ところが娘は、それから時々お寺へ参るようになり、いろいろと御利益も体験したようです。それでも夏期参詣の頃は時々お参りする程度でしたが、年末頃から突然目覚めたようにお寺参詣をするようになり、今年の寒参詣は皆参をしたと言いますから驚きです。

開運寺の御導師や大奥様にもよく面倒を見ていただき、無始以来しか知らない娘は如来滅後の御文を覚え、拍子木の打ち方を練習し、お給仕の仕方も習って、やがて青年会の活動もするようになりました。

そんな娘が、先日私に「御本尊さまをお迎えしたい。嫁に行くときは、その御本尊さまをお供して行きたい」と言ってきました。自分からそんなことを言うとは考えてもおりませんでしたので本当に驚き、さっそく御導師さまにお願いをさせていただきました。

ご信心に熱心だった私の父が、平成十五年の夏に帰寂するのですが、二人の孫がお寺の近くに偶然住んで、立派にご信心を相続してくれたのは、そんな父の導きによるのではないかと考えております。

最後に、この体験発表をすることを聞いた姪の愛子が、副導師にメッセージを送ってくれましたので、それを読ませていただきます。

「松山で暮らした一年間は、お寺が近くにあることが本当に心強かったです。ご信心のこともよく分かり、青年会にも参加することができて、貴重な時間を過ごせました。嫁ぎ先はお寺まで一時間以上もかかりますので、思うようにご奉公ができないと思いますが、この一年の経験を心の糧として頑張ろうと思います」

以上、お寺の近くで生活し、お寺に関わることで、こんなにも信心相続の力になることを知らされた体験を発表させていただきました。

ありがとうございました。

(平成十八年四月二日発表)

亡きお姑さんへの感謝

第七連合第一事行組 武市千明

ありがとうございます。

私は昭和三十一年に武市家に嫁いできて、本門佛立宗の信者になりました。武市家は先々代からの本門佛立宗の信者でしたが、初代の義理の祖父はとてご信心に熱心で、朝晩は必ず御宝前さまに向かい、御題目を唱えておりました。私たち夫婦が三代目、そして今は四代目になる長男夫婦と、孫の五人で暮らしております。

嫁いだばかりで何も分からずにいた私に、お姑さんである武市千代子はとてもやさしく接してくれました。女の子が無かったことや、ご自身がお姑さんから辛くされた経験もあったようで、嫁の私を、ほ

んとうに大事にしてくれたと思います。

日常のことはもちろん、ご信心についても決して無理強いをすることはありませんでした。かと言って、放って置くわけでもありません。御講のたびに声を掛けてくれて、一緒にお参詣をさせていただきました。御会式には家族そろっておめかしをして、ご参詣をさせていただいたのも、懐かしい思い出です。

当時のご近所のご信者さんも、とても親切にお世話をしてくださいました。そして私は、自然とこのご信心に親しむようになったのです。嫁入りしたばかりの私が馴染めたのも、組内のご信者さんによい関係があったお陰ですが、今にして思えばそれも、「お姑さんのお人柄によるものだったのかなあ」とつくづく有難く思い出し、感謝をいたしております。

そんなお姑さんが、突然思わぬ病に冒されました。直腸ガンでした。お姑さんに頼りきりだった私は、途方に暮れました。「どうしよう」「どうしよう」としか考えられず、おろおろするばかりでした。そして、義理の祖父がいつも御宝前さまに御題目を上げていた姿を思い出し、私も「お姑さんが少しでも良くなりますように」と願いを込めて、御題目をお唱えさせていただこうと思ったのです。

それからは毎日、一心に御題目をお唱えさせていただきました。すると間もなく、お姑さんの容態に変化が出てきました。熱が下がり、食事をすることが出来るようになったのです。御利益とはこういうものかと驚き、心からご信心の有難さを感じました。

何より有難かったのは、お姑さんが「貴女がお看経をしてくれたので、楽になった」と喜んでくれたことでした。その姿を見て、私は「これからは私が、一生懸命にご信心させていただこう」と決心をしたのです。お姑さんは身を以って、私にご信心の尊さを教えてくださったと思っております。

五十八歳という、まだまだ若い帰寂でした。これからもっと、いろんなことを教わりたいと思っておりましたので、それが叶わなかった残念さと、悲しさで、お葬儀の日は胸がいっぱいになりました。

お葬儀も終えたある日、主人がお姑さんから聞いていたことを話してくれました。それは「よくしてくれてありがとう。千明さんを大事に、幸せにしてあげてね。それからご信心は絶対に忘れないように」というものでした。確かにお姑さんのお世話は、嫁である私がしておりましたが、特別なことをしていた訳ではなく、当たり前のことをしていただけでした。ですからお姑さんのその言葉を聞いたとき、一瞬ドキッとすると同時に、お世話させていただいてよかったという安堵感と、改めて大事な人を亡くしたという悲しさで、涙が止まりませんでした。

あれから三十八年になります。お陰でいろいろな御利益をいただき、今日まで御法さまに護られて過ごしてまいりました。中でも、家を新築したときに御戒壇をお迎えできた喜びは、今も忘れることができません。武市家に嫁いで、このご信心にお出会い出来たこと、そして良い主人とお姑さんに恵まれたことに、心から感謝をいたしております。

その主人も、平成十一年に七十歳で亡くなりましたが、それからも主人とお姑さんの遺訓を守り、ご信心第一で過ごしております。今の私は、第七連合の皆さんや第一事行組の皆さんに支えられながら、組長のお役を拝命して御法さまにお仕えしております。開講一五〇年の御正当の年に、こうしてご奉公させていただける果報を悦び、このご信心の素晴らしさを一人でも多くの方にお伝えできますよう、組の皆さんと共に努めたいと思っております。そして、お姑さんのご奉公をお手本にして、組内のご信者

のご家族や我が家の家族がご信心を掴み、毎日口唱信行に励める環境ができますよう、努力をしてまいりたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年四月九日発表)

佛立信者になるための戦い

第八連合第一信要組 藤本孝司

ありがとうございます。

私の信者歴は、かなり長い方です。と言うのも、小学校一年生のころには、昨年(平成十七年)四月に寂光浄土へ帰りました祖母のマツエ婆ちゃんに、あちこちの御講に連れて行かれていたからです。部屋中に人が一杯いて、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」と唱えていたのを覚えています。小さな私は、御講の帰りにお供養をもらえるのが楽しみで、ついて行っていたような気がします。

高浜から道後のお寺まで、往復約二十キロを歩いて参詣したこともありました。山本ショブ代さんも一緒でした。祖父母が熱心でしたから、毎朝毎夕、お看経は欠かしませんでした。そんな環境でしたので、私も自然に佛立信者に染まった感じでした。ですから子供の私は、家が佛立宗なら、家族はみんな同じご信心をするものと思っておりました。

ところが私の場合は、気が付けば四十年も懈怠して、やっと四年前から朝参詣に励むようになりました。それまではどうしていたのかと言いますと、年に一度くらいはお寺にご参詣をしておりましたが、志納金が何なのかも最近になって知りました。ずっと納めていなかったと思います。それでも私はずっと「佛立宗の信者だ」と思っていましたし、一番有難い宗教ということも知っていました。と言うよりも、そのことが私の自信でもあり自慢でした。それを教えてくれた祖父母にも、ずっと感謝をしておりました。ただそれは、ほんとうのご信心の姿とは程遠いものでした。

私が朝参詣を始めたのは、四年前の春も終わる頃だったと思います。朝起きると明るくなっていましたし、気候もよく、寒くありませんでした。思い付いて朝参詣に出かけたのですが、これが私に幸いました。起きるのが、思ったより辛くなかったのです。でも、次の日からは、眠気と戦うのが大変でした。ですから、朝参詣を始めたといっても、月に十五日程のことでした。それでも当時の私は、頑張っているつもりでした。

夏も過ぎた頃、二～三人のご信者さんから「偉いねえ」と声を掛けていただきました。飛び飛びの朝参詣でしたから、少々気恥ずかしい面もありましたが、この久し振りに聞いた言葉に、私は励まされました。なぜならそれは、まだ小さい頃、祖母に連れられてご参詣した御講席で、同じように皆さんに掛けていただいた言葉だったのです。「偉いねえ」「偉いねえ」と言われるたびに、少しの間、あの頃の思い出に浸ることができ、とてもさわやかな気持ちになれました。そして「これからは自分が自分を褒めることができるように、もっと朝参詣に頑張らなくては」と言い聞かせました。あのとき声を掛けて

くださったご信者さん、有難うございました。

ところが冬が来ると、その思いはどこへやら、朝目覚めれば部屋は寒いし、外は真っ暗でしたので、「今日はやめよう」「今日はやめよう」の繰り返しでした。しかし「ここで止めては御導師に叱られる」「久米さんにお折伏される」「マツエ婆ちゃんの容態が良くなならない」などと思い返し、やっと月十五日の参詣を続けました。

今日ご参詣の皆さんには、レベルの低い話ですみません。でも中には、そのような信者も参詣しているということを知っていただければと思います。

やがて一年が過ぎ、一年で二百日の参詣を達成することができました。二年目も冬は辛かったのですが、二百日のご参詣をさせていただきました。

三年目からは壮年会御講に将引され、ご参詣するようになりました。一日でも早く「普通の信者になりたい」と思っていた参詣でした。間もなく高知佛立寺で開催された、四国布教区の壮年会研修会に誘われて参加しました。四国の各寺院から参加された壮年会の皆さんの、立派な体験談を聞くことができ、ただただ感心するばかりでした。高知の御導師のご講話にも大きな感動をいただきました。当山の御導師をはじめ、こんなに素晴らしい御導師ばかりがおられる佛立宗の信徒で良かったと、改めて実感させていただきました。

昨年のお正月からは、思いがけず八連合の壮年会幹事のお役を拝命し、「一層の精進をせねば」と思わせていただくことになりました。ただ、私をなんとか育て上げようとするお教務方や組内のご信者さんの気持ちは分かりますが、期待の大きさに頭を抱えることもありました。一番悩んだのは、朝参詣のお給仕係を勧められたことでした。そのとき、私は咄嗟に返事ができませんでした。

ところが二月の初め、「藤本さん、お給仕の練習するから本堂にあがってください」と言われました。「まだ、させていただくという返事もしていないのに……」と私はしぶしぶ本堂にあがりました。「誰にでも出来る」「簡単だから」と言われても、逃げて帰りたい気持ちに変わりはありませんでした。しかし練習を重ね、副導師から注意事項をお聞きし、二月二十一日の朝参詣で初めてご奉公させていただきました。緊張感とともに、とても清しい気持ちになりました。以来今日まで、週に一度はお給仕係のお衣に袖を通し、「お給仕はご信者さんの大事な願いや思いを御導師にお伝えする大切なご奉公です。真剣に行なってください」と副導師から教えていただいた言葉を忘れることなく、ご奉公を勤めております。

こうして少しずつ、信者らしいご奉公を学んでいった私ですが、もちろんこの間、何事もなく、まっすぐにここまでたどり着いたわけではありません。実は一年程前、朝参詣を止めようと真剣に悩んだことがありました。理由はたあいもないことでした。でも、一千日参詣だけはどうしても達成したいと思っていたので、私は悩みながら黄色いスタンプカードをじっと見ていました。すると裏に「信行は足にまかせて参詣し 口にまかせて南無妙法蓮華経」という御教歌が載せられていました。何度かその御教歌を声に出して読んでみると、不思議に気持ちが落ち着いてくるのが分かりました。そして私は気付きました。止めようと思うのも頭なら、へたに悩むのも頭です。「頭で考えて参詣するからしんどくなるんだ。何も考えずに、足にまかせておけば参詣できる。参詣したら口が勝手に南無妙法蓮華経と唱えてくれる。そうだ。これでいこう」。そう考えたとき、私の悩みは解消しました。

今朝も参詣カードにスタンプを押しました。これもささやかな楽しみです。このカードが無かったら、私は今日、ここにいなかったかもしれません。今思えば、随分謗法懈怠を続けていました。御教歌に「唱ふるが信心なれば唱へずに 有難がるは信心でなし」と教えられます。まさにその通りだと思えます。どうか四十年の間の懈怠謗法をお許してください。今あるのは祖父母のご信心と、根気よく十年に亘って私にお参詣を勧め続けてくださった久米利子さんのお陰です。この場をお貸りして御礼申し上げます。久米さん、有難うございました。御導師はじめお教務さま、祖父母やご信者の皆さんの支えをいただき、参詣カードにも後押しをされて、私は今日まで来れました。私は今、寂光浄土の祖父母に喜んでもらえる信者となれますよう、ますます精進したいと思っております。どうかこれからも、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(平成十八年四月十六日発表)

母から譲り受けたご信心を娘に

第九連合第二妙唱組 渡辺智恵子

ありがとうございます。

私の母・国塚カホルは、私が生まれる前に二人の子供を亡くしたこともあって、私が生まれると同時に、義理の姉にご信心を勧められて入信をしたそうです。戦中戦後の厳しい時代を、事あるごとに御宝前さまのお計らいをいただいて乗り切った母は、九十二歳の今、足は思うに任せなくなりましたが、それでも家事全般をこなし、各御講席や口唱会、お助行にと、組内のご奉公は欠かしません。

私のご信心は、そんな母から受け継いだのですが、時には母に反発して困らせたこともありました。しかし、ご信心の先輩として頼りにし、いろいろ学んできたことも事実です。母の掛かり付けの医師から、「国塚さんのような年の取り方をしたい」という言葉を聞いたときは、「母は御宝前さまから大きな御利益をいただいているのだ」「まったくご信心のお陰だ」と、心の底から随喜の思いが湧いたものでした。

私自身も、数々の御利益やお叱りをいただきながら、今日までご信心に励んで参りました。何からお話してよいか整理がつきませんが、今日は最近のことを、少しお話しさせていただきます。

三年前の平成十五年七月二十五日、主人は七十五年の生涯を閉じました。この主人は臨終に至るまでの最後の時間、それこそ大きな御利益をいただくことができました。

主人は平成十三年の検査で間質性肺炎、腎不全、肺癌と診断され、国立病院の医師からは、「手術のできる可能性は二十パーセント」と言われていました。それでも何とかなるものならと手術を受け、御導師さまご夫妻、副導師、お講師方はじめ多数のご信者さまのお助行をいただきました。お陰で手術は無事成功し、半年後には本山にお礼参詣させていただくこともできたのです。

それ以降、一年ほどは車の運転も出来ました。そして再び入院することもなく、苦しまず穏やかに、

凜として寂光へと旅立たせていただきました。妻として、夫の最後をちゃんと看取れたことは有難いことですし、何よりあんなに大変な病気を抱えながら、本人が苦しまずに臨終を迎えられたことが有難く、御宝前さまのお陰を感じさせていただきました。

主人の三回忌を済ませて間もない昨年九月、大阪に嫁いでいる長女が大腸ガンと診断され、手術をすることになりました。娘の子供はまだ小さく、私は動揺を隠すことが出来ませんでした。母は孫がガンだと聞いて、「自分の命に替えても何とか助けてやりたい」と言って涙を流しました。私も同じ気持ちでしたが、「ここはしっかりとお継がりしなくては」と気持ちを切り換え、ご祈願させていただきました。また、本人にもご祈願させていただくようにとお折伏をいたしました。

実はこの娘は、出産のときに大きな御利益をいただいて生まれた子供でした。出産が長引き、手術台の上で「これ以上時間がかかると、親子とも命が助からない可能性が高い」と決断を迫られましたが、私は御宝前さまにすべてお任せして、心の中で御題目をお唱えしておりましたので、痛くも恐くもありませんでした。そして少し時間は掛かりましたが、長女は無事に、元気に生まれてくれたのです。

そのときの産婦人科の先生は、「こんなに大変なことがあるのだから、孫子の代まで産婦人科医にはさせない」と言い、あまりの感動で看護師さんは泣き崩れていたそうです。こんな大変な中で御利益をいただいて生まれた娘に、母は日崇上人にお願いをして名づけ親になっていただきました。長女「佐知子」はそのことをよく知っていて、ご信心が大切だと感じていたようでしたが、家を出て離れ離れになると、それも縁の遠いものとなりつつありました。しかしこの度の病気で、祖母の姿を見て育った娘は、「自分にはご信心しかない」と決定ができたのです。

早速副導師にお願いして、大阪堺市のお寺・安国寺を紹介していただき、連絡をとっていただきました。私は娘の手術の頃から、孫の世話もあって娘の家に泊まり込み、電車で十五分ほどの安国寺さんに朝参詣をしてご祈願をさせていただきました。娘は御利益をいただき、初見の段階では「あと二年の命」とまで言われおりましたが、術後はガンの転移がまったく見られず、十月半ばには退院することができました。

退院の翌日から、娘は私といっしょに朝参詣をするようになりました。小さな子供のために、本人も必死でした。安国寺さんで千日参詣を勧めているのを知ると、早速それに挑戦し、私が松山に戻ったあとも、今日までずっと朝参詣を続けております。お陰で今では抗ガン剤も投与せずに治療をしておりますし、念のために別の病院で受けた検査の結果も、転移の心配はないとのことでした。

突然の出来事でしたが、私にとっても、娘とこんなに真剣にご信心に向き合い、たくさんのお話をすることができたのは、何よりも嬉しいことでした。

母から娘へ伝えられた真実の御法さまを、娘から孫へと相続することができました。今では私が逆に、娘のご信心に励まされることもしばしばです。ガンが発見され、「余命二年」と宣告されたときは、さすがに娘の主人もあきらめて悲観しておりましたが、今回の大きな御利益を間近に見て、ご信心の大事なことを感じてくれたように思い、これもお計らいと喜んでおります。

あとは娘の家族や下の二人の娘たちにも、しっかりとご信心が根づいてまいりますよう、私自身が今まで以上に励ませていただきたいとお願いいたしております。

ありがとうございました。

(平成十八年四月二十三日発表)

父が護持した二つの御戒壇

第十連合第二大歓組 高野正平

ありがとうございます。

私の父は戦前大阪に住んでいて、病気がきっかけで「本門さん」に入信し、御利益をいただいたと聞いております。母は大阪府泉佐野市の出身で、二人は大阪で知り合い結婚をしました。

戦後間もなく、父の故郷である郡中(今の伊予市)へ引き揚げ、私たち二人の息子を育てるようになるのですが、父が伊予市へ引き揚げた当初は、本門佛立宗の信仰をしていませんでした。そんなある日、通りかかった家から拍子木の音が聞こえるので、「もしかして本門さんの信仰では」と思って飛び込んだ家が、今は亡くなれましたが、当時は伊予郡松前町に住んでおられた吉村トモ子さんのお宅でした。父は早速吉村さんに教化親になっていただき、松風寺の信徒にさせていただいたそうです。

私が子供の頃の父の思い出といえば、毎朝決まった時間にお看経をする拍子木の音でした。それは私たち子供の目覚まし時計替わりで、私はそれが当たり前の生活だと思って育ちました。その頃、父からよく言われたのは、「御宝前さまはいつも、どこにいても護ってくださる。御宝前さまは生きていらっしゃるのだから、失礼のないよう行動なさい」ということでした。

私はやがて、二十九年前の昭和五十二年に青年会の会長のお役をいただき、御導師にご信心の指導を受けるようになりました。この年、御導師に結婚式をお願いをし、本堂で結婚式を挙げていただきましたが、そのときは御導師はじめ婦人会の方々にも大変お世話になりました。

私の結婚と同時に、父は新しい御戒壇を建立し、今まで護持していた御戒壇を私に譲ってくれました。私は御本尊さまと御尊像をお受けして、法灯相続をしました。そして父が長年、朝晩御題目をあげ続けた御戒壇と共に、私のご信心と新しい生活はスタートしたのです。

それから今日まで、知らず計らずの御利益をいただけてきました。今、一番の御利益と実感しているのは、私も妻も子供たちも、大病もしないで無事に元気に生活させていただいていることです。特に私は、六年前から職場が徳島に移り、単身赴任の生活で、毎週週末には車で二百キロを超える移動をして家に帰っております。その道中も一度の事故や車のトラブルもなく、無事に連合長、組長、会計のご奉公をお勤めし、仕事と両立できているのは、ほんとうにお計らいだと思います。

御法門でよく教えていただきます、無常の中に暮らしている私共ですから、「定業能転のお計いをいただいているんだなあ」とつくづく有難く思い、御宝前さまと父が遺してくれた功德に感謝をしています。

そんな中で、最近もう一つ嬉しく思うことができました。と言うのは、兄が三年前に心臓の病気で手術をして御利益をいただき、やっと朝夕のお看経ができるようになったのです。最近「お看経のお陰で仕事がうまくいった」などと口にすることもあります。父は生前、よく私に「兄ちゃんがもう少し信

心をしてくれたらいいのに」とこぼしていましたが、その父が亡くなったあと、父が護持した二つ目の御戒壇を相続した兄が、朝夕のお看経ができるようになったのですから、父もきっと喜んでいると思います。

そんなことを思うとき、父が自分のご信心のすべてを注ぎ、日々の口唱とお給仕を重ねた二つの御戒壇を、二人の息子がそれぞれ相続して口唱に励む姿に、改めて私たち兄弟への父の強い思いを感じます。

今年は開講一五〇年ご正当年です。今回はじめて本山にご参詣する兄と共に、私も本山参詣の申し込みをしております。これからも元気で、ご奉公と仕事が両立できるお計らいをいただけますように、そして私も父に習って子供や孫に功德を遺せますように、努力をしたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十八年四月三十日発表)

息子のお教化に随喜

第一連合第二妙泉組 萩原和代

ありがとうございます。

第二妙泉組の萩原でございます。私には長男貴宏、長女満喜、次男武彦の三人の子供がおります。昭和六十一年に縁あってこのご信心を始めたとき、長男の貴宏は中学一年生でしたが、私の言うままに素直に自宅の御宝前さまでお看経をしておりました。しかし、薫化会や青年会にお参詣することはありませんでしたので、ご信心に対する思いは他の子供に比べて薄いと感じておりました。埼玉に就職が決まったとき、金御本尊さまをお伴させましたが、あまりお看経をしている様子もありませんので、事あるごとに「お看経しなさいよ」と話しておりました。親元を遠く離れた息子の育成は、それが精一杯でした。

そんな長男から、今年(平成十八年)の二月に電話がありました。何事かと聞いてみると、同僚の方が墓地に行ったあと体調がすぐれず、見えるはずのない人影を見たりして精神的に参っているとのことでした。周りの人の勧めもあって、その墓地を管理しているお寺で拜んでもらったそうですが効果がなく、息子は「何とかしてあげたいのだけれど、どんな風にお看経したらいいのか」と私に尋ねてきたのです。大変驚きました。まさかあの子が、ご信心で人様を助けたいと思っていたなんて、考えてもみませんでした。

早速私は、お天目をお供えして、相手の名前と今の状態を御法さまにお話しして、「どうか助けてあげてください」と心をこめて御題目を唱えなさいと教えました。電話のあと、私もすぐに「今、息子の萩原貴宏が関わっている方が、本門佛立宗とご縁を結べますように」と一生懸命にお看経させていただきました。

その後、何度目かの電話で、「お供水さんをいただかせてあげたら、胸の苦しいのが楽になったよ」「肘も痛いというので、お供水をつけてあげるとスーッと痛みが取れたと喜んでくれたよ」と報告して

くれました。そんな話をしている息子も、そのことを喜んでいる様子が電話を通して伝わってきました。「よかったね」と声をかけ、人様のために一生懸命お看経をしたであろうことを思うと、我が子ながらちょっと誇らしくもありました。

実際息子は、同僚の方の部屋に金御本尊さまをお伴して行き、一緒に御題目をお唱えさせたようでした。そんな話を聞いて、私はお教化を具体的に進めようと思いました。そこで、このご信心を真剣にさせていただく意志を確かめるために、「佛立宗の信者になれば、他の神社仏閣にはお参りしてはいけないこと。今持っているお守りはもう持てなくなることを話して欲しい」と言うと、「そのことはもうちゃんと行ってあるよ」と申します。私は二度驚きました。息子に「謗法」という概念がどこまであるのか分かりませんが、予想外のしっかりした答えに、ほんとうに頼もしく思いました。そういえば貴宏は、これまでも懐中御本尊さまをととても大切に、決して粗末にしない子でした。きっと息子なりに精一杯、ご信心の尊さを伝えようとしているのだと思いました。

私は早速、御導師さまにご相談にあがりました。実は息子の同僚の方は、今回のことで大変不安になり、青森の実家に帰ることになったのです。せっかく息子が頑張った結んだご縁ですが、私や息子と遠く離れた青森では、とても育成の自信はありません。事情を聞かれた御導師さまは、青森のお寺にご連絡くださり、「あとのことは心配しないで、まずは入信できるところまで頑張りなさい」とおっしゃいました。そこで息子から青森のお寺の住所と地図、入信書を送らせましたが、返事はなかなか戻ってきません。「本人に一度も会わずに、入信書はいただけないかな」と、少しあきらめの気持ちも起きました。

そんな三月十一日、我が家で組御講が奉修され、副御導師を玄関にお見送りに出たときです。タイミングを計ったように、ちょうど郵便受けに入信書が帰ってきました。「桜庭陽(あきら)」「福井佐智子」、その二つの名前を見ながら、私は胸が熱くなりました。お目に掛かったことのないお二人ですが、息子の橋渡しのお陰で、佛立開講一五〇年の記念の年に、この二人の教化親とやらせていただけたのです。

思い起こせば昭和五十九年に、二ヶ月だけ勤めたところで知り合った武智正子さんが一年半後に電話をくれたことで、私は御題目のご縁をいただいたのですが、武智さんはふれあったいろんな人にご信心の尊さをお話する人でした。そしてご自分がいただかれた御利益を語って聞かせ、「あなたも救われる」と話してくれた人でした。私はその武智さんと、今回の息子のことを重ね合わせ、「お教化の原動力はここにあるんだ」と実感させられました。

桜庭さんと福井さんが今でも埼玉におられれば、息子も共にお寺参詣が出来るようになったかも知れません。それを思うと少し残念ですが、この経験は息子のご信心に、何かを残してくれたと思います。これからも今まで以上に息子に声をかけ、早く一人前の信者になれますよう育成をさせていただきます。ありがとうございました。

(平成十八年五月七日発表)

道後にお寺が出来る前の記憶

ありがとうございます。

私の両親は大正九年一月二十五日、同じ末広町に住んでいた靴職人、藤井富三郎さんのお教化を受けて入信しました。

松山のご弘通は、大正六年に広島県の呉で入信された日野仁太郎さんが、大正八年五月に郷里の松山に戻ってお教化を始められたのが最初と聞いておりますが、私の両親の教化親となられた藤井さんも、その大正八年の十月にお教化を受けたばかりの新人信者さんでした。そして、大きな御利益をいただいて入信した藤井さんは、熱心に両親に御題目のご信心を勧め、我が家は佛立信者となったのだそうです。当時、父の末吉は二十五歳、母のサダヨは二十二歳でした。

両親の入信した半年後、少しご信者さんの増えてきた松山は、三世ご講有の日随上人から「松山長寿組」の組名を頂戴し、日野さんが組長とされます。当時は「法華宗本門佛立講」と言っておりましたが、正式に宗門の組となった喜びはたいへんなもので、御法のご縁を得て新しい人生を手にした若い両親は、「いつか松山にも本門佛立講のお寺が建てられるよう、たくさんの人に上行所伝の御題目さまを勧めよう」と話をしたそうです。

やがて、この年の秋に日随上人をお迎えして、初めての御会式が勤まることが決まります。入信したての両親は、本山から一番偉い方が来られると聞いて身体中が緊張したと申しておりました。まだお寺もなく、常在の教務さんもいらっしゃらない片田舎に、わずか数軒の信者のためにご講有がお出ましくくださるのですから、「立派に御会式をお勤めできるように頑張ろう」と皆で話し合い、前の年にはまだ四軒だったご信者が種となって、御会式には十八戸のお教化がお供えできました。そんな空気の中で父親も三戸のお教化を成就し、また日野さんに教化親になってもらって、父親、つまり私の祖父の樋口道太郎や、父の兄の樋口義一も入信させたと聞いております。

主なご信者さんのお宅を道場としてご弘通に励んでいた松山に、将来のお寺のための「松山親会場御本尊」が授与されたのは大正十一年でした。私はこの年の十二月二十一日、両親の長男として出生します。松風寺の御本尊さまと同じ年に生まれた因縁を、両親はたいそう喜んでおりました。

ご信者の努力により、最初の親会場が完成したのは大正十三年でした。今のJ R松山駅の西側、南江戸村という場所でしたが、近隣から苦情が出て間もなく立ち退くことになり、その後も場所を転々としながらのご奉公が続いたようです。

私が四～五歳の頃は、現在の松山市駅のすぐ南側、永代町にお寺がありました。私は祖母に手を引かれ、よくお寺に参詣をしておりました。お寺といっても、看板をはずせば普通の家で、とても立派なものではありませんでした。しかし、いつも大勢の子供がいて、お看経が済むとご供養がいただけるのが楽しみでした。特におにぎりなどは、子供の顔ほどもある大きなものでしたので、嬉しくて嬉しくて、両手を差し出してニコニコしながら頂戴したことを、子供の頃の記憶として覚えております。

ここにお寺があったのは、二～三年だったと思います。それから再びJ R松山駅から西に三百メートルほど行ったところに、お寺は移転をしました。市駅の南にあった頃は、家から近かったのでたびたびお寺に行っていたように思いますが、お寺が移ってから、お参詣の機会も減っていきました。当時はどこへ行くのも歩きましたので、子供の足には少し遠かったのかも知れません。移ったお寺には、遠く

感じた記憶と、建物が少しお寺らしくなったと感じた記憶があります。

やがて昭和八年には現在の場所に移り、田んぼの中にポツンとあったお寺にお参りするようになるのですが、戦争に行ったり、商売を始めたりで、私はすっかりお寺と離れてしまいました。年に何度か御講をお受けする以外は、他のご信者とは滅多に顔も合わせない生活が長く続いたのです。

今は仕事のし過ぎで体調を崩し、息子に商売を譲りましたが、こうして昔の話を聞かれますと、「古いだけが取柄ではいかなあ」と反省をさせられます。松風寺草創の頃の、数少ない信者の生き残りとして恥じないよう、ご信心に励まねばと思うこの頃です。

ありがとうございました。

(平成十八年五月十四日発表)

子供の頃の記憶

第四連合第二長寿組 山田和俊

ありがとうございます。

私はこの季節になると、子供の頃の記憶を思い出します。田畑の菜の花や、蓮華の花の艶やかさ、それは半世紀も前に眺めていた、我が家を取り巻く風景でした。

しかしそんな穏やかな状景も、雨期には一転して大雨による災難を被りました。わずかばかりの麦畑は浸水の被害を受け、村の人たちも嘆き苦しんだものでした。

私が生まれ育ったのは、谷間の五世帯ほどの小部落で、山彦の木霊が木立の奥まで響き、一段と寂しさを募らせるような場所でした。決して楽ではなかった生活に、子供心にも「必ず春はやって来る」と願っておりました。私の家には牛一頭と小さな田畑がありましたが、小さな私には百姓を手伝う力もありません。でも家族は、このご信心で必ず幸福を掴もうと、朝夕懸命に御題目口唱に励んでおりました。

ある日、我が家の牛が変わった鳴き声で涙を流し、苦しんでいたことがありました。以前に母が大病を患ったとき、お供水で病気を治していただいた経験がありましたので、両親は牛にも御利益をいただきせようと桶にお供水を入れ、鳴き叫ぶ牛に飲ませました。牛は少しずつ、少しずつお供水を飲み、やがて桶の中は空っぽになりました。そして間もなく、牛は元の元気を取り戻すことができたのです。子供ながらも、私に疑う気持ちはまったくなく、お供水さんの力を素直に信じておりました。

しばらくして牛は、破水のように尿をしました。そしてその中に、拳ほどのカブの塊が出てきました。牛の餌は藁や野草、野菜の残り物などを刻み、手糠を混ぜてやっていました。その日は数個のカブを入れていたのが尿道に詰まり、どうやら牛の体調を崩していたようでした。それを見ていた小さな私は、御題目の力の素晴らしさに感激し、「世の中に御法さまよりすごいものはない」と子供心に思いました。

こんなこともありました。貧乏の子沢山と言いますが、五世帯あったご近所も、皆子沢山の家でした。そんな大勢の子供たちが、あるとき身体一面に湿疹のようなものができ、かゆくてかゆくてたまらずに、搔きむしりながら泣き叫んでおりました。そこで私の両親が、「お線香のお灰さんをお供水で溶かし、

身体に塗り続けると治る」と他のご信者から聞いたことを実行し、私に塗ってくれました。両親は近所の家にもその話をし、お供水とお灰さんを分けておりました。数日後、私も近所の子供たちも、今までのかゆみや苦しさが嘘のように引きました。そのとき、「やっぱり御法さまはすごい」と素直に感じた記憶も、今はっきりと浮びます。

やがて私は学校を卒業して、クリーニング店に弟子入りをしました。朝から晩まで洗い物をし、自転車の荷台に大きな箆を積んでの集配に一日が終わりました。見習いの私に、親方は容赦をしませんでした。馬鹿だの愚図だのと怒鳴られ、「仕事は無駄口をたたかず、手早く盗んで覚えよ」と、拳で数えきれないほど叱られました。親元を離れ、毎日怒鳴られての生活に辛抱できたのは、「御法さまが護ってください」という思いがあったからです。一生懸命に頑張れば、必ず良くなるという思いは、私に勇気と自信を与えてくれました。そして、そんな絶対に見守ってくださる御法さまを教えてくれた両親に、心から感謝をしたものでした。

あれから数十年が過ぎ、私もクリーニングの店を構えて、四人もの子宝を授かりました。これまで共に苦勞をしてくれた、良い家内にも恵まれました。子供たちは皆、すくすくと心優しく育てくれ、私自身も今日に至るまでどこも患うことなく、元気に過ごしております。そんな今の幸せを思うとき、素直にご信心を続けてきたお陰を思い、いろいろな現証御利益の体験を通してご信心の有難さを伝えてくれた、両親のお陰を感じます。

私はいつも、こう思います。信仰は人様に教わるものでなく、御法門を通して自分が求め、改良を重ねて自分が会得していくものだ。

私の両親は、自らの信じ、求める姿を子供たちに見せて、まだ小さかった私の記憶に、今も褪せないご信心の尊さを刻んでくれました。ほんとうに有難く思います。

私もまだまだ若輩です。こうして皆さまの前で体験発表をさせていただく機会を得たことに感謝し、両親に負けないよう初心に戻ってご奉公に励ませていただきます。

ありがとうございました。

(平成十八年五月二十一日発表)

み仏が語りかける御法門

第三連合第二勸信組 加藤由紀子

ありがとうございます。

私は御法門の聴聞が大好きです。今は子供たちの学校の時間の都合で、朝参詣をさせていただいても御法門前にお寺を出なければなりませんから、学校が休みの土曜や日曜くらいにしか御法門を聴聞できなくなりましたが、四～五年前までは毎日、朝参詣のたびに御法門を聴聞させていただいておりました。

私の御法門を聴聞する姿勢が変わったのは、一つの不思議な体験でした。私は若い頃から、その日に頂く御法門をただ素直に聴聞しておりましたが、その頃はご信心のことで分からないことがあり、今更

御講師にお伺いするのも恥ずかしいのでどうしようかと悩んでおりました。そんなとき、私の悩みに答えていただくかのように、ちょうど疑問を解決する御法門を聴聞させていただいたのです。私は「これだ！」と嬉しくなり、モヤモヤしていた気持ちが晴れて家に帰りました。ただ、そのときは「今日はたまたま私の聞きたい話で良かった」と思っておりました。ですが数日後、そうではないことに気付かされたのです。

しばらくして私は、またご奉公で一つの壁に当たりました。そして「こういう場合はどうしたらいいの」と悩み、なんとか御法さまに答え頂戴しようと、家の御宝前で一生懸命に口唱をしておりました。すると再び、それに答えてくださるかのように、私の悩みに関する御法門を聴聞することが出来たのです。私は驚きました。

何千首という御教歌が遺されている中で、毎朝御導師やお教務方が私の悩みを知って御教歌を選ばれるわけはありません。それなのに、私が聴きたい御教歌を中心に、まるで私のために御法門が説かれるのです。その後もこんなことが度々ありまして、私は「これは偶然ではない」と確信しました。あたかも私が質問し、それに答えてくださるようなことが、そんなに続くとは考えられなかったのです。そして私は、まさに「凡夫の目には見えないけれど、生きてまします御本尊さまが私をご覧になっているんだ」と感じるようになったのです。

それからの私は、「御宝前さまはごまかせない」と思い、ご信心のことやご奉公は出来る限り一生懸命させていただくようにいたしております。

今は御会式前の激励助行の期間中ですが、私は自分の担当連合以外にも、私の方からお願いして参加させていただいております。そしてその席で、自分の体験をお話しさせていただいて、御法さまはいつも私たちをご覧になっていること、そして御法門聴聞が大切なことをお伝えさせていただいております。

これからも御法門の聴聞に励み、み仏のお智慧を一つずつ身につけて、自分自身を磨いていきたいと思えます。

ありがとうございました。

(平成十八年五月二十七日発表)

イライラせずに参詣を

第六連合第二本因組 岩城たかの

ありがとうございます。

昨年七月の組御講のお席でのことです。私は八月の御講にお参詣できませんでしたので、「八月七日の御会式に、八月分の志納金や添講のお布施をお預けします」と言って、組長さんとお寺でお目に掛かる約束をいたしました。

ところが御会式の当日は、お寺は大勢の人でいっぱい、組長さんの姿を探すのですが見当たりません。私は長男と嫁にお寺へ連れてもらっておりましたので、嫁の「早く、早く」とせかす声に、二階で

お供水をいただくのもそこそこに、三階の本堂に向かいました。

本堂も既にいっぱいの人で、前の方が少し空いているとのことでした。そこで私が前に行こうとすると、長男が「お母さん。前もいいけど、今度とは出るときに大変だから、ここにしたら」と申します。仕方がないので、一番後ろの席で壁にもたれながら、長男と嫁と並んで座りました。御宝前さまに手を合わせ、皆さんと声を揃えてお参りを始めましたが、とにかく組長さんに会うことだけを考えておりました私は、なかなか落ち着きませんでした。「お預けできなかつたら、また改めてお届けするのも大変だし……」といったことばかりを思いながら、辺りをキョロキョロ見回していたのです。

そんな散漫な気持ちでしばらく拝んでいると、私たちの前を「ありがとうございます」というタスキをかけたご信者さんが、二～三人で連れ立って右側に行きます。私は腰が曲がっていますので、頭を突き出したようにしか座われません。その頭をかすめるように次々とご信者さんが前を通るものですから、「お看経に身が入らない」とイライラしておりましたら、嫁が「お義母さん、あの人たちは他寺院からのご参詣者で、右側に座るように決められているから、イライラせんってね」と言います。私はそれを聞いて、「成程、そういう訳か」と得心いたしました。そしてイライラして嫁に気を遣わせたことを恥ずかしく思いました。

御会式はやがて「引き題目」になりました。御導師の一声に続いて、私たちも「南～無～妙～」とお唱えさせていただくと、曲がった私の身体が真っ直ぐになりました。私はお腹いっぱい息を吸い込んで、次の「法～」と唱えました。すると私の頭の中が真っ白になり、「せっかく御会式にお参りしたのに、組長さんをお探しして集中できず、その結果他寺院のご信者とも知らずにイライラしていた自分が申し訳なかった」と、心から思いました。そしてようやく、「そうだ。もし組長さんに会えなくても、受付のご奉公者の方にお預けして帰ろう。なんだ。いろいろ考えることじゃあなかった」と考えが変わったのです。お陰でその後は落ち着いてご参詣できました。御法門を素直に聴聞させていただくこともできて、「お参詣させていただいて本当によかった」と思いました。

御会式が終わって、本堂から退堂するときも、大勢の人で混み合っていました。車椅子の方もありましたので、「動く余地がないなあ」と思っていますと、息子が「すみません。老人が出ますので」と皆さんに断ってくれ、エレベーターまでさっと移動できました。一階に降りてから、息子がご供養をいただきに行きました。私は嫁がトイレに行っている間に受付に行き、事情を話して「組長の佐野さんに渡していただきたい」とお願いしました。すると受付の方が「どちら様ですか」と聞かれるので、私は紙袋に書いてある名前を指差し、「岩城です」と答えました。その方は私の顔と袋の名前をじっくりとご覧になり、やがて直立して「岩城さん」と大きな声で言われます。私は驚き、背を伸ばして「はい」と返事をしました。するとその方は丁寧に頭を下げて、「いつも結構な体験談をありがとうございます」と言われたのです。私の方がびっくりしました。何度か体験談を書かせていただきましたが、こんな風に丁寧に礼を言われたのは初めてでしたので、とてもうれしく思いました。

受付の方と思っていたのは、お道具販売のご奉公をされていた鎌水さんという方で、台の上には私の教化親・樋口貞代さんのご長男の店で作っている「松風寺せんべい」も販売されていたので、懐かしさから一缶五百円で購入しました。

そのまま玄関に行くと、嫁が靴を持ってきてくれ、次男が車のドアを開けて待っていました。「なん

とまあ、事がこんなにスムーズに進むなんて」と有難く感じました。

私は考えました。法が妙なのか、妙が法なのか分かりませんが、とにかく素直にご参詣できると妙なことがあります。私はイライラしていた自分に気付き、ご参詣に集中してからはっきり流れが変わりました。御利益は必ず頂戴できることを、このたびは今更ながら、改めて思わせていただくことができました。深く感謝いたします。

どうか皆さま、お励みください。御宝前さまは必ず見守ってくださいます。現証は顕われるのです。

ありがとうございました。

(平成十八年六月四日発表)

御会式のご奉公の功德

第六連合第一本因組 大口輝美

ありがとうございます。

平成十五年十一月十六日のことです。その日は秋の御会式で、私たちの六連合はご奉公当番になっておりました。私と大原さんは、松毬庵でご奉公者の朝のご供養を作る係でしたので、朝一番にお寺に行かなければなりません。いつもは主人の車でご参詣するのですが、あいにくその日は主人が仕事でしたので、二人で始発のバスに乗りました。

朝のご供養調整は、第一座の終了と同時に次々ご奉公者が来られるので、目の回る忙しさです。しかし無事にご奉公を済ませ、後片付けをしてからご参詣もさせていただき、早朝からの緊張感とお祖師さまの御会式のお手伝いをさせていただけた充実感で、気持ち良く家に帰ることができました。

夕方、私は洗濯物を取り込み、たたんでいると、長男の作業衣のボタンが取れかかっているのを見付けました。付け直そうと針箱を開けると、縫針が一本足りません。前の日に孫たちが来たので、針を使って遊んだのかと心配になりました。娘の家へ電話をしようとしたとき、次男の作業衣のほころびを縫ったことを思い出しました。しかし次男は、今日はその服を着て仕事に行っています。また心配になりました。

次男は自動車の整備士で、作業衣は上下がいっしょになった「つなぎ服」です。それを着て、仕事中は動きまわっていることを思うと、とても不安になりました。どんな格好をしているのかも分かりません。もし針が身体に刺さり、そのまま折れたら、それこそ身体中を回って大変なことになります。冷や汗が出ました。

連絡を取らなければと思いましたが、次男の携帯電話の番号が分かりません。会社に電話して呼んでもらおうかと思案しているところに、長男が帰ってきました。早速事情を話して長男から電話をしてもらいました。

電話を受けた次男は、「服を脱いでみるから」と言って一度受話器を置き、間もなく返事がありまし

た。そのわずかな返事を待つ間、私の心臓は壊れそうなほど大きな音がしておりました。そして、「曲がった針が糸を付けたまま、お尻の辺りにあったよ」という次男の返事を聞いて、私はようやく「ああ、よかった」と胸を撫で下ろしました。

一息ついて、朝から針の付いたままの服を着て、車で出勤ながら、仕事中に何もなかったことを、私は改めて不思議に思いました。そしてこれは、朝早くから御会式のご奉公をさせていただいた功德で、御利益をいただいたのだと感じ、ほんとうに有難く思いました。ちょうどこの日は、私の実家の父の命日でもありましたので、御会式でお塔婆をあげてご回向いただいております。ですから、「父も守ってくれたのかなあ」とも思いました。早速私は息子たちに、御会式のご奉公の功德やご先祖の供養の大事なこと、御題目のご信心は一生懸命にすれば、すぐに御利益が顕れることなどを話しましたが、どこまで分かってくれたのでしょうか。

ともかくあの日は、私の不注意でしたが、御宝前さまから御利益をいただきました。そして、たくさんの方が参る「御会式奉修のお手伝い」をさせていただく功德の大きさを知りました。私は夫婦共働きで、普段は充分なご奉公ができませんが、また機会を捉えて、「出来るご奉公は精一杯させていただこう」と思った一日でした。

ありがとうございました。

(平成十八年六月十一日発表)

自分を変えた家族との出会い

第七連合第三事行組 井生幸雄

ありがとうございます。

これから私の自己紹介を交えての体験発表をさせていただきます。

私の姓は全国的にも大変珍しく、井戸の井に生まれると書いて「いおう」と読みます。私は九州の出身で、この姓も九州にしかないと聞いています。

十三年前、私は松山に縁があり、初めて四国の地を踏みました。瀬戸大橋が開通し、本州と陸続きになったといっても「四国はまだまだ田舎だろう」とちょっと小馬鹿にした思いで壮大な橋を渡って来たことを、今でも鮮明に覚えています。私にはもともとそんなふうに見える、傲慢な性格がありました。

私は男ばかりの四人兄弟の末っ子で、父は糖尿病のため私が幼少のころから入退院を繰り返しておりました。そのため、一家を支える母親は、休む暇もなく毎日仕事に明け暮れ、家にいないことも度々でした。ですから家族揃っての旅行や、一家の団欒などは、私は経験せずに育ちました。

「勉強しろ」「勉強しろ」と口うるさかった父も、中学二年のときに他界しました。それからの私は、決して真っ当な人生を送ったとはいえません。私達四人兄弟を育てるために、ただ一人で必死に働いていた母親を何度泣かせたことでしょうか。そのたびに、父親代わりの八歳離れた一番上の兄から、よく叱られたものでした。

そんな生い立ちの私が、矢野家の長女と縁を得て、結婚をしました。妻は私とまったく正反対の生い立ちで、温かい家族と信仰の中で育った人でした。結婚後、実際に「温かい家庭」に直面した私は、頭の中に描いていた憧れや希望とのギャップで、悩んだり迷ったりすることもしばしばでした。私の味わったことのない家族の和やかさ、穏やかな雰囲気戸惑いと驚きがあり、すぐには溶け込むことが出来なかったのです。

その頃の私はお寺とも縁遠く、生意気にも「宗教に頼る者は自分自身が弱いからだ」とか、「神や仏などこの世には存在しない」などと思っておりました。ですから妻が「実家で御講があるから行ってく」と言っても、私には無縁のことだとまったく無関心でした。

そんなある日、母や兄はもとより、矢野家の両親や妻、そして子供たちにまで、私が原因でたいへんな迷惑を掛けることになりました。既に新築の家で両親と同居を始めていましたが、それは別居や離婚を迫られても当然な程の出来事でした。しかし、そんな私を前に両親は、「人間は失敗もある。人を泣かすこともある。でも縁あって結ばれた家族だから、末長く皆で仲良く励ましあい、支えあいながらやっていった方がいいんじゃないの？」と言ってくれました。予想もしていなかった言葉に、ただただ有難さが一杯で、私は涙が止まりませんでした。

妻の父親は罵詈雑言ではなく、温かく、優しく私を包んでくれました。同じ人間で、同じ子を持つ男でありながら、どうしてこんなに寛大でいられるのだろうと驚きました。そしてこのときほど、今までの私の傲慢さを反省したことはありませんでした。

やがて父が、「こんなときね、お祖師さまの前で今の自分の素直な気持ちを打ち明けてみるといいよ」と、物静かな口調でポツリと言いました。そしてその言葉は、私の心の中にスーッと浸透していきました。私は早速、お寺へ向かいました。そして誰もいない静まり返った本堂に一人座り、今までのお詫びの心で無我夢中に「南無妙法蓮華経」とお唱えしておりました。

しばらくすると妙に力が沸き、体中が熱くなってきました。そのうちお詫びの心から、今現在生かされていること、今ある環境への感謝へと心が変わり、やがて「よし。また一から新たに頑張るぞ」と勇気の心まで戴くことができました。

この日から、私のご信心に対する気持ちが変わりました。同時にそれは、温かい家族に対する気持ちの変化でもありました。そして私は、今年の寒参詣は一日も休まず皆参らせていただくことが出来ました。

それからというもの、私は毎日お寺へ行かないと気分が落ち着かず、仕事帰りに自然と足が向くようになりました。朝参詣はなかなかできずにおりますが、せめて休日の日曜日には、夫婦揃って朝参詣をさせていただこうと努めております。

思えば今までの身勝手な心を、このように変えていただいたことは、私にとって一番のお計らいでした。お祖師さまとご縁を結ばせていただいたことも、今の家族とのご縁も、すべて私に絶対に必要だから巡り合わせていただいたのだと感じ、有難く思うのです。

最後に、六月二十二日に家族全員が「矢野」の姓を継ぐことになりました。実はこの日は両親の金婚式にも当たる日で、これもごく自然の流れで決まったことです。このことを九州にいる母や兄に告げると、大変喜んでくれました。

また恐れ多くも、開講一五〇年本山参詣の八月十九日は、私の誕生日でもあります。何もかもがパズルのようにピタッ、ピタッと上手く型にはまっていくことに、大変な驚きと感動を覚えます。

私は今、本門佛立宗の信者として誕生したばかりですから、まだ何も分かりませんが、信仰者としても夫婦としても、尊敬する両親に教わりながら、一步一步前進していこうと決意を新たにしました。そして「ありがとうございます」の感謝の気持ちを忘れることなく、千日参詣を目標に頑張ろうと思っています。よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(平成十八年六月十八日発表)

病のお陰で巡り会えたご信心

第八連合第一信要組 安田修子

私の家は、昭和六年頃に母方の叔父からお教化を受けて入信しました。松風寺の前身、松山長寿組の所属でしたが、当時は両親が住友に勤めておりましたので、住まいは新居浜の社宅でした。

その頃はまだ、愛媛県には西条の佛立寺しかお寺がありませんでしたので、はじめは三大会やお正月に、家族で佛立寺へご参詣させていただく程度でした。両親が御会式の前日からご奉公をさせていただくようになった頃、小学校に入学したばかりの私は、ちょうど股関節脱臼の治療で半年ほど入院しておりました。退院後は、夏休みなどの長期の休暇になると、私は佛立寺の前に住んでいた叔母の家に預けられ、朝参りをさせていただくようになりました。ただ、その頃はまだ、法華経のご信心の有難さを、私はよく知ってはおりませんでした。

私は先天的な股関節脱臼で、現在なら生まれたとき直ぐに分かって治るのですが、当時は医学事情も悪く、今のように簡単にはいきませんでした。子供の頃の私は足に泣かされ、何度死のうと思ったことでしょう。でも両親にしてみれば、私以上に辛い思いをしたのではないかと思い、今にしてつくづく済まなく感じております。

悪い足に悩まされながら成長した私は、戦時中に無理をして関節炎を起こし、入院を余儀なくされました。しかし敗戦後の病院では十分な治療も出来ず、なかなかよくなりませんでした。そんなとき、高浜の故・石崎イワヨさんにお折伏をいただき、私もやっとその気になって、ご信心をさせていただくようになるのです。

石崎さんからは、「朝食前にお供水を一升とお線香一本のお看経をいただきなさい。朝ご飯か済んだら、毎日お線香十本のお看経と三升のお供水をいただきなさい」と申し渡されました。私は最初、「そんなの出来るかしら」と思いました。ところが、食前にお供水を一升もいただいたら、お腹が膨れてご飯はいただけないと思っていたのに、かえって食が進み、おいしくいただけただけで不思議に思いました。

私が改良してお看経に励むようになると、石崎さんをはじめ高浜のご信者さんが、遠方にもかかわらず、和気の家まで大勢でお助行に来てくださいました。心強く感じ、有難く思いました。

二週間ほどして、足に力が入るのを感じました。私は「御利益をいただいたなあ」と思いましたが、でもまだスムーズに歩くことは出来ませんでした。しかし、これに力を得てお看経に励み、「道後のお寺まで、杖をつけてでもなんとかご参詣したい」と思うようになりました。

当時は国鉄の和気駅発五時二十五分の松山行きに乗ると、市内電車も早くから動いていましたから、そのまま乗り継いで道後温泉駅に行けました。そしてお寺に着く頃には、ちょうど六時のサイレンが鳴っておりました。私は朝参詣を始めてから、少しずつご奉公もさせていただくようになり、向井清太郎さんがお参詣できなくなってからは朝の受付も私がさせていただきました。あの頃は御導師にお渡しする言上書を筆で書いておりましたから、毛筆が苦手な私は困りました。でもお陰をいただいて、しばらくすると普通のお勤めも出来るようになりました。

やがてご縁をいただき、大阪府豊中市の興立寺のご住職の家内として、いろいろなご奉公をさせていただくようになりました。生まれつき足が悪く、何度も死のうと思った頃が不思議なほど、有難いご奉公の毎日でした。これも御法のご縁をいただいたお陰、石崎さんのお折伏のお陰と、感謝を忘れることはありませんでした。

安田御導師のご遷化後、私は平成三年に松山に戻り、再び一信者として松風寺でご奉公させていただくようになりました。そしてご承知のように、私は今でもバイクで毎日ご参詣を続けております。年々歳を取り、皆さんにも「危ないよ」と言われるようになりましたので、そろそろ自分でもバイクは止めようかと思っておりますが、バイクがないとご参詣が難しくなるので、なかなか決断ができません。実際に風の強い日や、夜の暗いときは不安ですが、御法のお陰で過ごした人生ですので、簡単には私の大事な足のバイクを、止めることができないのです。

実は昨年十二月にも、こんなことがありました。三日の役中御講が、暗い冬の晩でしたので、私は「今日は勘弁していただこう」と勝手に決めて不参したのです。心を改めて考えれば、御宝前さまにお願いしてお参詣できないこともなかったのですが、そのときはそんなことは考えず、ケロッとしておりました。ところが翌朝目覚め、起きようとしたら寝返りも出来ません。背中から腰にかけてものすごく痛くて、中々起き上がれなかったのです。それでもこのままじっと寝ていても治ると思えず、痛いのを我慢してやっとの思いで起き上がりましたが、今度は足が前に進みません。どうにか杖をつけて洗顔し、御宝前さまのお給仕をさせていただいて、昨日不参のお懺悔のお看経をお線香五本させていただきました。そして翌日目覚めたとき、痛かった所からフワッと痛みが抜けて、私は背中が軽くなるのを感じました。こんなことは私も初めてでした。本当に有難い、不思議な現証をいただきました。

思いますのに、もし私の身体が生れつき健全でしたら、今こうしてご信心をさせていただいているかどうかは疑問です。病はそんな私に、御法さまとのご縁を結んでくれたのですから、「悪い足に感謝しながらご奉公をさせていただかねば」と思っております。そして何かのご縁で、こうして皆様と一緒にご信心させていただける有難さを肝に銘じ、元気で報恩ご奉公に励ませていただこうと切に念ずるこの頃です。

ありがとうございました。

(平成十八年六月二十五日発表)

ご信心第一を感じた交通事故

第九連合第二妙唱組 国塚信生

ありがとうございます。

私は両親のご信心を受け継いだ二代目の信者で、現在は第九連合の連合長のお役を頂戴いたしております。物心ついたころから、ご信心はとても自然に私の心にございましたから、とくに反発することもなく、「佛立宗のご信心しかこの世にはない」と思うくらいに日常生活に溶け込んでおりました。子供の頃は母に連れられて御講やお寺にお参詣させていただくと、ご供養のお菓子をいただき、それが当時はとても楽しみでした。物の無い時代でしたから、子供心にお参詣すればお菓子がもらえることが、とても嬉しかったのを今でも思い出します。

両親の入信の切っ掛けは詳しく聞いておりませんが、男の子が育たないとかで、事実私の兄も幼くして亡くなっておりました。そこで私は子供の頃、おかつば頭で女の子のような格好をさせられておりました。しかし、御宝前さまに手を合わす毎日の生活のお陰で、いろいろとお護りをいただくことを、幼心に知っておりました。私のご信心は、そんな幼児体験の延長の上で今日まで参りました。

今日はそんなふうにならぬとご信心を受け止めていた私が、しっかりとご信心に励まねばならないと改めて感得をした、交通事故の御利益を発表させていただきます。

転職のために、タクシーの運転手を目指して第二種免許を取ったのは平成五年のことでした。心機一転、「この仕事にかけて頑張ろう」と思い、四十半ばでの決断でした。

無事に就職が叶い、仕事にも慣れて四～五年たったある日のことです。私は夜中にお客さまをお乗せして、市内から古三津方面にタクシーを走らせておりました。すると松山聖稜高校の前の緩やかなカーブを越えて、なだらかな下りにさしかかったところで、対向車が中央線を越えて、真っ直ぐ私の運転する車の方に突っ込んできました。そこは片側二車線の道路で、私は内側を走っていたので、咄嗟に左車線に避けようとしてしました。その瞬間、バックミラーに後ろを走る軽自動車映り、「このままハンドルを切ると、後方の軽自動車が大変なことになる」と思いました。私は大声で、お客さまに「危ない」と叫びました。そして私の車は少し左に避けながら、ものすごい音を立てて衝突しました。

と言いましても、私にはそのときの記憶はありません。気が付いたときには、三津の済生会病院に運ばれておりました。私は首をシートベルトで切っていましたが、上半身にはとりたてて怪我もなく、右膝のお皿だけ骨折をしていました。お陰で二ヶ月入院し、一ヶ月の自宅療養をして仕事に復帰することができました。衝突した車の状態を見た人は、十人中十人が「運転手は死んだだろう」と思ったそうです。家族もそのときの写真を見て、「よくこれだけの怪我で済んだものだ」と御宝前さまのご守護に感謝するのみでした。

相手の運転手はお酒を飲んでおり、先輩を送って市内の自宅に戻る途中の居眠り運転でした。彼は県立救命救急センターに運ばれたそうで、腰の骨を折る重体でしたが一命は取り留め、今は普通の生活ができる身体になっているそうです。お乗せしていたお客さまは、私が大声で怒鳴ったものですから身構

えてくださり、不思議に無傷でした。また、後方外側車線を走っていた軽自動車には、若いお母さんと小さな子供さんが乗っていたようで、私の車を擦って少々車が傷付きましたが、これもお母さん、子供さんともに無傷でした。

事故のあとは御導師はじめ、ご信者の皆さまのお助行を頂戴し、信者であることの有難さを感じました。そして改めて、本当に不思議な御利益をいただいたことに感謝し、「今回は両親のご信心に助けられた」と痛感しました。このとき私は、いつも身近にあるご信心を、それまではともするとあと回しにしてしまうこともあった自分を反省し、「これからは自分が真剣にご信心に励んで、子供や孫たちがお護りいただけるようにならねば」と決意したのです。

現在は連合長のお役をいただくものの、仕事の合間のご奉公ですから、まだまだ皆さんに助けられる部分が多いのですが、私がしっかりご信心をさせていただくことで、家族にご信心の素晴らしさを伝えられるように、一層の努力をしたいと思っております。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(平成十八年七月二日発表)

御戒壇建立の御利益

第十連合第一大歓組 大政歌子

ありがとうございます。

私の主人は昭和三十五年に亡くなりました。そのとき私は三十七歳で、長男は中学二年生、長女は小学校の五年生、次女はまだ小学校に入る前でした。

私の主人は、結婚して間もなくネフローゼ腎炎を発症し、たびたび往診にきてもらう生活をしておりました。そんな私たちの様子を見ていた松岡美樹さんのお母さんが、「私の息子もこのご信心を始めて健康になったので、あなた達もぜひ御題目を唱えなさい」とご信心を勧めてくださったのがきっかけで、私たちは本門佛立宗の信者になりました。入信後は組の皆さんがお助行に来てくださり、主人は早速御利益をいただいて、御題目の口唱を始めてからは順調にお小水が出るようになりました。主人も私もほんとうに有難く思い、それからは二人で、一生懸命に口唱に励む毎日が始まりました。お陰でその後、主人は小康を保って子供を設けることもできたのですが、しかし子供たちの成人する姿を見ることなく、若くして寂光に帰ることになったのです。

主人が亡くなって、私は一人で子供たちを育てるために百姓仕事に精を出すのですが、なかなか生活は楽にならず、昭和四十年頃から勤めに出るようになりました。働きに出たといっても、農作業の合間を縫っての仕事でしたから、最初は一日二百円ほどしか給金がもらえませんでした。ですから、楽にはなりません。生活の足しにはなる程度の状態で、それでも数年の間はがんばりました。

そんな私たちの生活を見かねた近所の紡績工場が、私を正社員に採用してくれたのは昭和四十四年のことでした。糸の選別をする仕事に就くのですが、家から一分の所に職場がありましたので、用事のあ

るときはいつでも家に帰ることができました。農作業の忙しいときや御講のあるときなども、仕事を抜けることを許していただきましたので、私にとってはほんとうに有難い職場でした。ですから、「これも御法さまのお護り」と職場の計らいに感謝をしていた私は、五十五歳のときに遺族年金が十万円上がるというお話しをいただいたときも、これ以上贅沢を望むとバチが当たると感じて、「私は今のままで結構です」とお断りをしたほどでした。

六十歳になったとき、私はその職場を定年退職して百姓一筋の生活に戻りました。子供たちも成人しておりましたから、あとは余生を御法にお仕えさせていただいて、自分が食べられるだけあればよいと思っただけの決断でした。ですから十五年間、正社員として勤めた退職金も、自分のために使おうとは少しも考えず、その全額で御戒壇を建立させていただきました。主人が亡くなったあと、女手一つで無事に子育てができたこと、そして念願の御戒壇建立が叶いましたことは、ほんとうに夢のようでした。

ご奉公中心の毎日を送るようになって、数年が経ったある日のことです。社会保険庁に年金の手続きに行ったあと、担当された職員の方から電話をもらいました。そしてその方から、「あなたの書類を見ていたら、もらえるはずの遺族年金を頂かれてませんね」と言われて、私は五十五歳のときに年金が十万円上がる話をお断りしたことを思い出し、そのときの事情をお話ししました。すると私の話を聞いた職員の方が、「あなたは正直な人だ。分かりました。僕がもらってない分の年金がもらえるよう手続きをしましょう。この書類が僕の目にとまって良かったですね」と言われたのです。突然の話に私は驚きました。

後日このことを、組内の小池さんにお話しすると、「それはアナタ、思い切りよく御戒壇を買わせていただいた御利益よ」と言われ、改めてそこにも、御法さまのご加護のあったことに気付かされました。御法さまはいつも私をご覧になって、手を差し伸べてくださっていることを強く感じ、有難く思いました。

あれから二十年、私もずいぶん年をとり、昔のようにはご奉公できなくなりましたが、それでも日に陰に御利益をいただいて、今日まで無事に過ごしてまいりました。これからも身体の続く限りは、精一杯御法さまにお仕えし、ご奉公に勤めてまいりたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年七月十六日発表)

我が家の記念事業と二つの御利益

第一妙泉組 中島正昭

ありがとうございます。

お寺では宗門の慶讃法要のたびに記念事業をしておりますので、私も見習って御宝前をお荘厳させていただいております。高祖立教開宗七百五十年の記念には、御尊像の御修復をさせていただきました。父が昭和三十年八月に御戒壇を建立したときにお迎えした御尊像は、四十六年を経過して少し色があせ

ていたのです。また、矢野寛さんの協力で仏天蓋をお磨きし、内陣には蛍光灯を付けていただきましたので、御宝前がとても明るくなりました。ほかに御神酒錫と御初水のお天目、仏飯器も新調させていただきました。そしてこのたびの佛立開講百五十年の記念には、蠟燭立を二対にさせていただくことを思いつき、日本桜の前机と御乗台を作製させていただきました。二対のお蠟燭でお看経をするので御宝前が荘厳され、御題目がよくあがります。朝夕の口唱が楽しみになりました。

本年(平成十八年)、私は御宝前さまから大きな御利益を二つ頂戴致しましたが、これは奉賛ご奉公の記念として、御宝前を荘厳させていただいた功德と感得しております。今日はその御利益をご披露させていただきます。

一つ目は三月二十六日に当山門祖会を控えた一週間前の出来事でした。私は普段、毎朝家内と車で朝参詣をしておりますが、その日は晴天無事奉修祈願参詣の初日で、弘通部として参詣受付の準備がありましたので、家内には後から自転車で来るよう告げ、私は一人で運転して自宅から五分のお寺に向かっておりました。お寺の前の信号で左に方向指示器を出し、曲がろうと徐行していたときです。突然ドスンという音がして、ひどい衝撃を受けました。何が起こったのか分かりませんでした。咄嗟にブレーキを踏んでいたようです。路肩に乗り上げて、左前方に停車しておりました。

暫くして車から出てみると、車の右後部が大破しておりました。男の人がいたので、どうしたのか尋ねると、彼は歩道の街路樹を指差しました。見ると街路樹が傾いて、そこに車が停まっており、私は追突されたことを知りました。まだ薄暗い五時三十分頃のことでした。

事情を聞くと、相手の車は前方不注意が原因で車線を越え、五十キロのスピードで私の車の後部に追突したようでした。相手は初心者マークの若い女性でしたが、怪我はありませんでした。しかし私の首は左に傾き、真っ直ぐに戻りませんでした。伝言を頼むためにゆっくり歩いてお寺へ行き、受付で事情を話しました。そして私は、間もなく救急車で病院へ搬送されました。

御会式のご奉公は出来ないだろうと覚悟しておりました。レントゲン検査のあと、「頭には異常がなく頸椎捻挫です。一週間自宅で安静にしてください。ここは通院に遠いので、近く of 病院に紹介状を書いておきます。念のため、明日一回だけ診せに来てください」と言われました。近くの病院に通院するというので安心しました。

御導師さま、奥さまにはご心配いただき、直ぐに病院へ駆けつけてくださいました。診察が終わると、もったいないことに御導師さまの車でお寺まで帰りました。大破した私の車を見ていたご信者さんは、お寺へ帰って来た私を見てびっくりされていました。皆さんにご心配いただき、有難く思いました。

しばらくは電気治療に通院をしましたが、無事に勤務に戻り、朝参詣にも復帰して、六月には負傷平癒の御礼言上をいただきました。事故のあと、つくづく考えますのに、いつも一緒に朝参詣をしている家内を、その日に限って乗せなかったのは大きなお計らいでした。もし隣に乗っていたら、フロントガラスに頭を打ち付けていたかも知れません。そう思うとゾッとします。不幸中の幸いでした。大難を小難に変えていただく大きな御利益を、私たちは御宝前さまから頂戴したのです。

もう一つの御利益は、隣地購入のお計らいです。自宅の隣は妹の嫁ぎ先の実家ですが、今は義弟の名義になっており、長く空き家になっておりました。我が家と地続きですので、売却するなら譲ってもらい、敷地を拡げて子供の家を建てたいと念願しておりました。ただ、私は第二の就職の身です。夢また

夢の物語りと思っておりました。

ところが御宝前さまのお慈悲をいただき、昨年の暮れに義弟から、「土地を購入してくれないだろうか？」と打診をしてきたのです。有難い話です。再就職でも私に勤めがあることで、銀行の融資を受けることもできました。二月からとんとん拍子に事が運び、五月には売買契約を済ませました。念願叶って長男弘雄が新築することになり、七月二日には地鎮式をしていただきました。

この新居は、十月十九日が竣工予定日となっております。御宝前の間を構えておりますので、私の家に奉安している御宝前一式をそのまま新居に奉安させていただき、暫くは新居で朝夕のお看経をさせていただくつもりです。もちろん我が家にも新たに御戒壇を建立し、護持御本尊を奉安させていただくつもりであります。そしてこの新しい御戒壇は、将来二男徳孝に相続させたいと考えております。

佛立開講百五十年の勝縁の年に、ご莊嚴の功德で我が家は大きな御利益を頂戴致しました。八月十九～二十日の本山参詣には、年老いた母を残して三家族八名で本山に御礼参詣させていただきます。

ありがとうございました。

(平成十八年七月二十三日発表)

亡き主人が教えてくれた佛立信仰

第二連合第二堅信組 岡本多喜子

ありがとうございます。

私の入信は昭和三十三年ですから、佛立信者になっただけいぶん経ちます。当時、私は十七歳でしたが、その年、父が胃がんで亡くなって、内藤家に嫁いでいた姉から勧められて御本尊をお受けしたのです。

父の菩提を弔うための入信でした。しかし、まだ若かったこともあって、私は熱心なご信者の仲間入りをすることはありませんでした。見かねた母親から「せめて御会式だけは参詣しなさい」と言われたのを金科玉条のように守り、長年御会式参詣ぐらいしかしないご信心を続けておりました。

そんな私が、心機一転して朝参詣を始めたのは、平成十四年の六月に、主人が脳梗塞で倒れたのがきっかけでした。

その日、トイレに行った主人は、私に声をかけてきましたが、話し方がおかしいので様子を見に行くとヨダレを流しておりました。私は慌てて救急車を呼び、梶浦病院に連れて行っていただきました。病院では脳梗塞と診断され、私はすっかり動転しておりました。しかも先生が言われるには、足の先の血流も止まっているので、このままでは足を切断することになるかも知れないとのことでした。突然主人に襲い掛かった不幸に、私はどうしてよいか分からず、呆然として付き添っておりました。

それでも入院して二日ほどは食事ができましたが、その晩から主人の意識はなくなり、昏睡状態になりました。自分の体調がどんなに悪くても、御宝前にお縋りすることなどなかった私が、「お寺に行こう」と決意したのはそのときでした。

まだ人の通りも少ない早朝の空気の中を、私は毎朝、一生懸命にお寺に通いました。そして御導師が

お出ましになり、朝参詣が始まると、必死で御題目をお唱えしました。私は御法さまに、「どうか主人の足に血が通って、切らずに済みますように」「意識が戻って、元気になれるように」「どうしても助からないなら、一番楽に寂光に行けますように」とお願いしました。自分のことでは、そんなに一生懸命ご祈願をしたことはありませんでしたので、必死で主人のことを祈る自分が不思議でした。

朝参詣を続ける中で、毎朝御法門を聴聞し、私はご信心のことを学んでいきました。そして尊い教えに出会いながら、長く懈怠して過ごしてきた自分に気付かされ、亡くなった母にも申し訳のないことをしたと後悔をしました。せめて残りの人生は、精一杯ご奉公をさせていただいて、ご信心の徳を身につけようと思えたのも、このときの朝参詣のお陰でした。

主人はお計らいをいただいて小康を得、二ヶ月の入院で退院をすることになりました。それからは主人と二人で、できるだけ御講参詣もさせていただくようになりました。ご信心を中心とした、楽しい時間でした。しかし十二月に入って主人は二度目の入院をし、県病院へ移ろうかと相談をしている中で、帰らぬ人となりました。最後の短い時間でしたが、御題目と共に過ごせたのは幸せだったと、私は素直に思えました。

ところで主人が闘病生活に入ってから、私は看病のために仕事を辞めておりましたが、その主人の帰寂後に元の職場から電話があり、仕事に復帰して欲しいと言われました。私は驚きました。若い人でも就職が難しい頃でしたので、私のような年配の者に職場の方から声をかけてくださるとは、考えてもみませんでした。しかもこのタイミングです。「御法さまが見守ってくださるというのは、こうしたことを言うんだな」と得心し、改めて御題目の有難さに感謝をさせていただきました。

あれから三年半が経ちました。私は今も仕事を続けながら、精一杯のご奉公をさせていただいております。今年は春に、とても丁寧に組のお世話をいただいた松窪秀雄さんが帰寂されましたので、それからは組内の役中さんといっしょに、「私も松窪さんの分まで頑張ろう」と気持ちも新たにご信心に励ませていただいております。

今、こうしてご奉公ができるのも、亡くなった主人のお陰です。主人の病気が教えてくれたご信心の喜びに感謝しながら、他の人にご信心をお伝えできる信者となれますよう、これからも努力したいと思っております。

ありがとうございます。

(平成十八年七月三十日発表)

足のご奉公の大事を学ぶ

第三連合第一勸信組 水口良子

ありがとうございます。

私は物心がついたとき、すでに佛立信者でした。小さな頃の記憶に、母の手に引かれてお寺参詣をした思い出がございます。自然と薫化会や青年会にもご参詣させていただきました。ところが成人する頃

からご参詣を疎かにするようになり、数年の間は御会式に参詣をする程度の時期もありました。

やがて私は結婚をし、昭和四十年頃から主人と朝参詣をさせていただくようになりました。主人は宗外の人でしたが、父の折伏を素直に受けて真面目にご奉公をしてくれ、朝参詣から仕事に行く生活にもすぐに馴染んだようでした。私も当時、実家の「ふじや食品」で仕事をしておりましたので、お寺の帰りには平和通の店に直行しておりました。夫婦で仕事を持ちながら、朝参詣やいろいろなご奉公をさせていただく日課が、私たちの生活でした。

そのうち主人が事務局のご奉公をさせていただくようになり、私も婦人会のお役をいただいて、ご奉公を務めるようになりました。相変わらず朝参詣から始まる日課は変わりませんでしたが、ご奉公が忙しくなった分、組内のご信者のお世話が疎かになっていきました。直接お訪ねしていた方への連絡を電話で済ましたり、じっくりお話しさせていただくところを書類を渡して済ましたりすることも増えました。しかし、毎日のご奉公で忙しく充実していた私は、一人ひとりのご信者さんへの接し方の変化に気付かずにおりました。

そんな平成二年の三月七日のことです。私は交通事故に遭いました。萱町の保険所で健康診断を受けた帰りに、自転車の私は車に撥ねられたのです。

救急車で日赤に運ばれるとき、私は妹の電話番号を伝えたようですが、まったく記憶はありませんでした。私の怪我は複雑骨折で、すぐに手術を受けました。手術のあとは、不思議なほど痛みがありませんでしたが、主人と弟は先生から、「おそらく正座はできないでしょう」と言われていたそうですから、神経もだいぶ傷ついていたのでしょう。もちろんそのときの私は、そんなことは知らずにおりました。

手術後は病室のベッドの上で、毎日一生懸命にお看経をいただきました。私は当時、婦人会の会長のお役をいただいておりましたので、御法さまに傷をつけたという思いと、多くの方に心配をお掛けした申し訳なさと、とにかく御法さまに対してお詫びの気持ちでいっぱいでした。そして一日も早く快復し、元通りご奉公がさせていただきますようにとご祈願を続けました。

お陰さまで無事に退院できましたが、しばらくは松葉杖の生活で、家の中ではいざっておりました。どこにも行けませんので、毎日お線香十本のお看経をさせていただき、「早く歩けるようになりますように」とご祈願させていただきました。

少し良くなった頃、「お寺参詣がしたいけど、三階の本堂まで階段をあがれるだろうか」と主人に相談し、夜中にお寺に連れて行ってもらいました。あの頃はまだ、お寺にエレベーターがありませんでしたので、朝参詣をするには階段を昇れる丈夫な足が必要だったのです。誰もいない真っ暗な階段を、主人と二人で恐る恐る上がりました。無事に三階の本堂に着いたときには、嬉しくて涙が止まりませんでした。そして私は、翌日から再び朝参詣をさせていただくようになったのです。

それから間もなくご参詣させていただいた御講席でのことです。御導師から、「足のご奉公が足りない」とお折伏をいただきました。足で歩いてご信者を育てる功德が積めていないことを、今回の事故は御法さまから教えていただいたのだと御導師に諭され、最近組内のご奉公が疎かになっていたことに、私はようやく気付いたのです。

私は早速改良し、それからは少し不自由な足でしたが、時間のある限り「足のご奉公」をさせていただくように努めました。お陰で今は、出来ないと言われた正座も出来るようになり、御法さまの有難さ

をしみじみと感じております。

あれから十六年経ちますが、私たち夫婦の生活は、今も朝参詣から始まり、元気にご奉公をさせていただいております。「足のご奉公」はご弘通の基本と教わります。私は御法さまから、歩ける足の御利益をいただいたのですから、これからも出来る限り足を運んで、ご弘通ご奉公に頑張っていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年八月六日発表)

主人のご信心で栄える私の家族

第四連合第三長寿組 阪本純子

ありがとうございます。

私はこの世に生を受けて八十八年になります。昨年十一月には私の子供と孫、ひ孫が料理屋の一室に集まって、米寿のお祝いをしてくれました。全員で二十名を数える大家族からお祝いの花束などをいただき、ひ孫たちも走り回って賑やかなことでした。思えば主人と出会い、主人のご信心の功德に護られて授かった家族です。今日までの御法のご加護と主人のご信心に、改めて有難く感謝する一日でした。

私が主人の朋久との縁を得て、大阪で結婚したのは、主人が二十八歳、私が二十四歳のときで、ちょうど日米戦争が始まる二か月前のことでした。翌年十月には長男・禎造が生まれますが、主人は間もなく召集となり、内地勤務の高射砲隊に入りました。

それから主人は浜松・神戸・大阪と部隊を移り、大阪の桜島で三年を過ごして、終戦の年の八月に無事に家へ帰ってまいりました。しかし、今まで勤めていた会社は解雇されていたので、郷里の松山へ帰る決心をして、そのまま単身松山へ行きました。私が長男と次男を連れ、主人の後を追って未知の土地へ旅立ったのは、翌年の八月のことです。そしてまだ焼け野原だった松山の土居に住まいを構え、暮らすことになるのです。

昭和二十二年のことです。歩き始めていた次男が急にへなへたと座り、立てなくなりました。県病院で診察してもらいますと小児麻痺と診断されました。いろいろ手を尽くしましたが、戦後のことで難儀をしました。私は結婚前から大阪の本成寺の信徒として、佛立宗の信仰をしていました。そこで「これは御法さまに助けていただくしかない」と思い、道後の松風寺を教えてくださいました。ちょうどお寺に近い、石手川沿いの県営住宅に入居できて、「これもお寺参詣をしなさいという御法さまのお計らい」と感じました。松風寺では、当時の組長の戒田教三さまをご紹介いただき、いろいろお世話をいただくことになりました。

新年の初御講にご参詣させていただいた時のことです。日崇上人が御法門で、「寒参詣にお参りしたら功德がいただける」と教えてくださいました。私は家に帰ると、早速主人にその話をして、「明日

から三男をおんぶしてお参りする」と言いました。すると主人は、「子供たちに風邪でも引かせたら大変だから、自分が代わってお参りをする」と言って、翌朝初めてお寺にお参詣しました。

そのころは主人も商売を始めておりましたので、お寺から直接、土橋の店に行きました。主人が戻ってくるまでの時間は、とても長く感じました。「初めて佛立宗のお寺に一人で参詣して、どう感じただろう」と思うと、ドキドキして何も手に付きませんでした。ところが私の心配をよそに、主人は夕方家へ帰ると、「今日はよいお話を聞いて有難かった。これからは毎朝お参りする」と申します。その言葉を聞いて、私は本当によかったと感謝いたしました。

それからの主人は、「お参りしてから店へ行くと、よう売れる」とよろこび、その後は毎朝お参りして店へ行く日課となりました。お陰で無一文から始めた商売も軌道に乗り、小児麻痺と診断された次男も御利益を頂戴して、元気に育っていきました。こうした御利益をいただく中で、主人は御法さまへの感謝を忘れない、立派な信者になっていくのです。

主人は何事も筋を通す人でしたので、ご信心に関しても自分に厳しく、また子供たちにも将来のために、厳しくご信心を躰けておりました。そんな主人を日崇上人は信頼くださり、事務局のご奉公も長く務めさせていただきました。

主人が他界してから、早二十年近くなりますが、本当に立派な人でした。私には過ぎた人だと感謝し、今も尊敬しています。そして、この主人が起こした信仰が、米寿を祝ってくれた大勢の家族の幸せにつながっていると思うと、ご奉公の功德の大きさにただただ感謝させていただくばかりです。

今私は、子供たちの家族も御法を中心にして、円満に過ごして欲しいと願っています。そして時々父を思い出して、お手本にして欲しいと思っています。ご信心の功德は、子々孫々を栄えさせると教わるのですから。

ありがとうございました。

(平成十八年八月十三日発表)

山津波が避ける

第五連合第二本清組 村上ミツエ

ありがとうございます。

私は昭和十年に村上家に嫁ぎました。お舅さんの村上祐三は、神戸の西台にある大法寺の熱心な佛立信者でしたので、結婚式も御宝前でしていただきました。私は結婚するまで、村上家のご信心のことは何も聞かされていませんでしたが、信仰心はありましたので、新しいご信心にも素直に入っていくことが出来ました。

舅の祐三さんが熱心にお寺のご奉公をするようになったのは、六十歳の頃からでした。家から西台のお寺までは少し遠いので、家の近くのご信者さんと数件で御有志を募って道場を建立し、毎日そこでお給仕をして一日中ご奉公をするほどの打ち込みようで、御会式等の主な行事のときだけ大

法寺に参っておりました。戦後、その道場は、大法寺の末寺の正法寺となりました。

そんなお舅さんの薫陶を受け、私は佛立信心を学びました。結婚当初、家では祐三さんが御宝前のお給仕をし、お姑さんと私とで毎朝一時間半のお看経をしてから一日が始まりました。ですから私は、如説修行抄もお姑さんの唱える声で覚えました。しかし私が本当に御法さまの有難さを知ったのは、それから数年後に六甲の摩耶山が崖崩れを起こしたときでした。

その年は大雨が続き、我が家の裏手の摩耶山も、地盤が緩んで崖が崩れるかも知れないと皆が心配しておりました。そこでお舅さんは、有志で建立した道場の御本尊さまを、万一に備えて自宅にお移しいたしました。山津波が起きたのは、その数日後でした。恐ろしい地響きを立てて山は崩れ、海に近い家も、二階近くまで土砂が入るほど大規模な土石流が押し寄せました。もちろん街の様子が一変する被害が出ましたが、そんな中で、我が家だけは不思議なことに山津波がよけて通り、家の両側へと流れたのです。山津波のあと、一歩外に出ると、砂が見えるだけの状態でした。そしてその光景を見ながら、「我が家にお迎えした道場の御本尊さまが、私たちを護ってくださったんだ」と思いました。生きていらっしゃる仏さまのお力で、押し寄せる土砂が避けられたとしか思えない、それほど不思議な光景でした。私のご信心への思いは、このときからはっきり変わったと思います。

この山津波のあと、近所の子供が六人も熱病になりました。家の中まで土砂が入った不衛生な状態が原因だと思いますが、私の次男も四十二度の熱が二十日間続き、治まる様子がありませんでした。やがてお舅さんが「海岸端によい医者がある」と聞いてきて、早速尋ねて行きました。まだ海岸端まで行くには、砂山や泥沼を越えて歩かなければなりませんでしたが、やっとの思いで病院にたどり着き、事情を話してお願いすると、往診してくれることになりました。もちろん病院も被害を受けており、二階の窓から出入りする状態でした。そんな中を先生が家に来てくれたのですが、診察をいただいた結果、関節炎を起こしているのですぐに手術をすることになりました。手術が終ってからは、病院は入院患者を受け入れる状態ではありませんでしたので、土砂で埋まった町を苦労しながら家につれて帰りました。

手術のあと、お医者さんには「長く高熱が続いたので、良くなっても後遺症が残りますよ」と言われておりました。しかし、土砂を押しつけた御本尊さまのお力を見た私は、「きっと御法さまが助けてくださる」と確信して、一生懸命にご祈願をさせていただきました。お舅さんも熱心なお助行をしてくださり、お陰で日々に快復し、次男は後遺症もなく元気になりました。残念ながら一緒に発病した近所の子供は、それぞれ後遺症が残り、手が曲がったり歩行が困難になりました。そんな子供たちの気の毒な様子を見ると、我が家はお舅さんのお陰で御法さまに助けていただけたことを有難く思いました。

その後もたびたび、私は御題目の現証で助けていただきました。私の主人は神戸製鋼に勤めていましたが、鉄くずが目には刺さり、手術をしたことがありました。このときも「目が見えなくなる」と言われましたが、必死でお看経をして御法さまに助けていただきました。まだまだ数々の御利益をいただいておりますが、あの山津波のときの不思議な現証は、今でも目にあざやかに残っています。

そして何かあるごとに、その現証を思い出してはお看経に力がこもり、御利益をいただいていたのです。

今日は私のご信心の原点になるこの御利益を皆さまに聞いていただきたく思い、発表させていただきました。

ありがとうございました。

(平成十八年八月二十七日発表)

私の開講百五十年

第五連合第一本清組 佐伯洋子

ありがとうございます。

私にとって開講百五十年は、素晴らしい年になりました。先日の第九支庁合同の本山記念参詣には、私共夫婦と息子たち夫婦、そして孫三人の三世代でご参詣ができました。その際、孫の昇悟は松風寺薫化会を代表してお給仕係りを仰せつかり、本山御宝前のご内陣で、御導師さまにおしぼりのお給仕をさせていただきました。一千名の参詣者が見守る中、緊張しながらもご奉公の喜びを噛み締める様子に、よい経験と思い出を授かったと心から喜んでおります。

孫の勇飛は二歳半ですが、先日我が家に遊びに来たとき鼻歌を歌っていますので、「何の歌？」と聞きますと、「お寺の歌よう！」と答えます。そして「バスの中で歌ったろう？ 柑橘の花の香りよ、風に聞く遠き潮騒……」とやり出したので、皆で驚いてしまいました。本山参詣をさせていただくバスの中で、皆で練習した松風寺讃歌を早くも覚えてしまったようです。早速家族皆が集まって、松風寺讃歌の大合唱をさせていただきました。

今年の夏期参詣は、そんな孫たちの「絶対に皆参する」という強い意志で臨ませていただき、息子の嫁の美和さんも頑張ってくれて、私と一緒に一日も休まずご参詣することができました。遊びに行く日は午前二時にお寺参詣をした日もありました。美和さんは他宗から嫁いできた人ですが、ご信心を中心に孫たちを育てる頑張りには、ほんとうに頭が下がります。

こうして、ご信心を家族中で楽しみながら、私も今年、千日参詣を達成しました。今の幸せを思うとき、四年前、初めて百日参詣カードを手にしたときの悲壮な思いがウソのようで、御法さまから大きな御利益をいただいたことを実感します。

私が突発性難聴をきっかけに朝参詣を始めたことは、以前にも体験発表をさせていただきました。平成十三年の八月に発病し、手術を受けたのですが、耳の後ろの神経を損傷して右耳の機能は完全に失われました。左耳の奥にも腫瘍があり、翌年再手術を受けることになるのですが、「今度失敗すると、完全に音の世界から隔離される」という不安と、真っ直ぐに歩くことが出来ないほどの手術のダメージの大きさに、私は極度の鬱状態になりました。社交的だった私が、誰とも会いたくないと思い、生きる自信もなくなっていました。そんな中で、亡くなった叔母に夢の中で励まされ、主人や家族、ご信者の皆

さんに励まされて、私の朝参詣は始まったのです。

お寺参詣をするために、歩く練習をしました。辛かったです。少し歩けるようになって、百日参詣カードを手にしたときは、「この百日が自分の命かも知れない」と思いました。しかし「歩けなくなるかも知れない」「聞えなくなるかも知れない」という不安は、本堂で御題目を唱えているときだけ忘れることができましたので、必死で朝参詣を続けました。

そんな中でお計らいをいただき、身体も元気にしていただいて、いよいよ念願の千日達成が近づいてきた昨年の秋、私は自分のご信心の変化に気付きました。私は子供の頃から多くの人に支えられ、どちらかというとそれに甘えて、自分のことを中心にもの考える性格でした。ですから御法門で菩薩行やお教化のお話を聴いても耳の痛い思いをするだけで、自分のことばかり考えておりました。それが千日達成を目前にして、「他の人のお役に立ちたい」「お教化がしたい」と思うようになったのです。人との出会いが楽しく思えるようになり、ご信心の話も自然に話せるようになっていきました。中学生の頃からの親友の永井節子さんから久しぶりに電話があったのは、ちょうどそんな、心境の変化に気付いた頃でした。

永井さんは私に、自分のやっている趣味の会の展示を見にくるよう誘ってくれました。私と彼女は、お互いに結婚して違った環境で生活するようになって、ときどき会って話をする大親友ですが、私が発病して自分に自信をなくしてからは、誰にも会わない時期が続いていましたので、久しぶりの再会となりました。ところが会って話してみると、伸び伸びと人生を送って幸せそのものに見えた彼女は、悩みを抱えて独り苦しんでおりました。彼女の家がお寺に近かったこともあって、私は自然とお寺参詣を勧めていました。自分の体験を話し、お寺に参って御題目を唱えれば、必ず心の安らぎをいただけると一生懸命に話す自分に、今までの私と違う不思議な感覚を覚えました。

彼女は私の話を聞いて、お寺参詣をする気になってくれ、十二月の初めの「新入信徒の集い」に参加してくれました。まだ入信はしていませんでしたが、御導師さまのお話しに感じるものがあつたようで、年が明けて入信を決意してくれました。開講百五十年の記念の年に、半世紀のお付き合いをしてきた親友が教化子になってくれ、ほんとうに嬉しく思いました。

彼女は多趣味で忙しく、私が思うようにはご奉公をしてくれませんが、それでも連合御講や組御講、婦人会御講にも都合のつくときはご参詣をしてくれます。先日は布教区の婦人会口唱会にも、車を運転して新居浜清扇寺までご奉公してくれました。少し時間はかかるかも知れませんが、じっくりと育てていきたいと思っています。

千日参詣を達成して、私は自分が強くなったのを感じます。病気をしてから私は、御法さましか頼るところがなく、不安を打ち消すために必死でお縋りをしてきました。しかし今は、御法さまが付いていらっしゃるから大丈夫という安心感があります。これが私を、強く変えました。

自分が変わることで他の人にも心が向かい、お教化ができました。不安のドン底で始めた千日参詣も達成しました。家族皆で本山記念参詣にもご参詣できました。息子の夫婦や孫たちも、ご信心を楽しみながら毎日を送っています。私にとって開講百五十年は、終生忘れられない、記念の年になりそうです。

ありがとうございました。

(平成十八年九月三日発表)

御法さまのお陰で得た多くの出会い

第七連合第二事行組 藤本一式

ありがとうございます。

私は山口県出身ですが、父親が帝人株式会社の松山進出に伴い、仕事の関係で先に松山に来ておりました。その父親から「松山に仕事がある」と私たち兄弟は呼び寄せられ、今の事業を始めることになるのです。このとき私は、親企業の所長さんに紹介され、現在の家内と結婚するという二重の喜びを得ました。

私は長男でしたので、結婚後も我が家に代々続いている宗教を継いでいくつもりでおりました。しかし、家内が一向に我が家の信仰をする様子がありませんので、思いきって問いただしたところ、「私はこの宗教がないといかんのよ」と答えて、毎晩一時間ぐらい御題目を唱えております。当時は何を一所懸命に拝んでいるのか分かりませんでした。今思えば、家内は実家からお供してきた懐中御本尊さまに向かって、朝晩お看経をしていたのです。

そんな家内の熱心な信仰に、当初は違和感があって馴染めなかった私ですが、誘われてお寺に何度か足を運ぶうちに自然と馴染んでいきました。と申しましても、若い頃は仕事が忙しく、お正月や御会式等にお参りをさせていただく程度でしたが、そんなある日、河野お講師のお母さまから、「今日もよくお参りができましたね」と声をかけられ、年甲斐もなく嬉しかったこと、今でも忘れません。こうしてお寺に足を運ぶうちに、ご信者さんの顔馴染みが増えて、親切に声をかけていただくようになったのも、私が素直に御法さまに向き合えるようになっていった原因かも知れません。やがて御導師さまの御法門を拝聴しているうちに、私は「この宗旨なら良い」と感じ、一家で改宗する決心をして、私の母共々入信しました。

私は佛立信者となることで、大きな喜びが一つ増えました。それは壮年会に入会して、四国四県の壮年会研修会にも参加するようになったことです。他寺院のご信者さんとも交流を深める機会を得て、私にはご信者さんのお友達が増えました。ご信心をしていなければ絶対に出会うこともない、いろんな地域の、いろんな年齢の、いろんな仕事をする人たちと、同じご信心をしているというだけで昔からの友人のように打ち解けられるというのは何とも不思議な感じでした。しかし今では、そんなご信者さんたちと再会するのが、私の何よりの楽しみとなっています。

壮年会への参加をきっかけに、私はいろんなご信者方とご奉公をさせていただくようになり、今では連合次長のお役と事務局総務部のお手伝いもさせていただくようになりました。これも皆、御法さまからいただいた人の縁と感謝をしております。

ご信心を始めたお陰で、大きな御利益もいただきました。私は若いころから身体が丈夫で、健康には自信があったのですが、六十歳を超えたころから体調に異変を感じるようになりました。最初にそれに気付いたのは、平成十二年の十一月頃でした。ベッドに横になった私は、意識が遠のいていくのを感じ

たのです。すぐに私は、「おい、何かおかしい」と家内を呼びました。驚いた家内は、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と御題目を唱えて、私の頬を叩きながら意識を取り戻そうとしておりました。家族がすぐに救急車を呼び、私はそのまま入院しました。翌日の検査で狭心症と診断され、心臓の周りの血管が酸欠状態になると意識を失うと説明を受けました。

同じ状態が私を襲ったのは、平成十七年五月四日、本堂でのお看経中でした。そのときはその場におられた御導師さまや副導師さま、河野久子さん、大西カオルさん達の介護を受けて救急車を呼んでいただき、大西さんが付き添ってくれて入院しました。元気にお寺参詣ができるようになるまで、皆さんにご心配をいただき、御導師さま始めご信者さんの優しい気持ちがよく分かって、とても有難く思いました。

思えば二回の狭心症の発作が、二回とも人の大勢いる中で起こり、二回とも御題目を唱えていただいて大事に至らなかったのは不思議な気がします。「誰もいない場所で発作が起きていたら……」と思うと、「これも御法さまにお護りいただいているお陰かな」と感じるのです。

健康に自信のあった私が、今はそんな持病を抱える身となりましたが、こうしてご奉公させていただけるのも、御法さまのお計らいと喜んでおります。

見知らぬ土地で佛立信者の家内と結婚し、初めて御法さまとお出会えたのも何かの縁です。ご信心のお陰で新しい出会いを増やしていける自分にも、有難く思っています。そして何より、今までいろいろと難をご守護くださった御法さまに感謝し、これからも大事にご信心お持ちしていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年九月十日発表)

育成の恩を知って

第八連合第二信要組 藤川 昇

ありがとうございます。

私がこのご信心にお出会いさせていただいたのは、昭和五十年代の後半だったと思います。母の勧めで個人教化になり、入信させていただいたのです。

それまで私の家は、母一人のご信心でした。母は以前からお付き合いのあった佐伯峰春さん、トミ子さんご夫妻に勧められて入信し、ご信心をしていたようです。母はなにごともし始めればとことん頑張る性格でしたから、お寺へも遠い道のりをよくご参詣しておりました。

御講師が増えられて、今の僧坊が出来たときは、母は御講師方の身の回りのお世話などのご奉公をしておりました。しかしその頃の私は、入信はしておりましたものご信心には無関心でしたので、母から「今日は御講があるからご参詣しなさい」とか、「御会式だからいっしょにお参りしよう」と誘われても、いろいろと言いつけてご参詣を避けておりました。

それから数年が経ち、妹の主人が仕事の都合で横浜に行くことになりました。そして妹夫婦には、その頃二人の手の掛かる子供がおりましたので、家族でいろいろと相談した結果、母も横浜に行くことになったのです。出発の数日前、母は私に「これからは自分がしっかりとご信心に励んで、御宝前さまに家族を守っていただきなさい」と言いました。私たち家族の将来を心配し、真剣にご信心を勧める母の気持ちに逆らうつもりはありませんでしたが、今までご信心は母任せでしたので、まったく自信はありませんでした。

母がいなくなると、それからがとても大変でした。第一に御宝前さまのお給仕の仕方が分かりません。朝夕のお看経をしようにも、何をどうしたらいいのかさっぱり分からず、戸惑うことばかりでした。幸い、私の家から車で五分程のところ佐伯さんがおられたので、分からないことは聞きに行き、そのたびに丁寧に教えていただくことができました。佐伯峰春さんは、残念なことに私がご信心を学ぶようになって間もなく、寂光へと旅立たれましたが、亡くなる数ヶ月前まで精一杯のご奉公をなさっておられ、私に信者の姿をしっかりと教えてくれました。それは今思い出しても、ほんとうに頭の下がるご奉公で、最後に大事なことを教わったと感謝しております。

佐伯さんが亡くなられてからは、三浦和子さんが親身になってご指導くださいました。車に乗らない三浦さんは、私の家まで通われるのもたいへんだったと思いますが、毎月二回、お寺からの書類や大放光などを松山からバスで届けてくださり、ご信心のことを話してくださいました。その三浦さんが、私の組から第一信要組へと移られたときは、とても不安になりました。というのも、その当時の私は、まだ組内のご信者さんの名前も分からない状態だったのです。しかし、三浦さんが所属変えをされることで、ようやく私は、「自分の責任でご信心をさせていただこう」と思うことができました。そしてそれが、私が一人前の信者になれるよう世話をしてくれた母や佐伯さん、三浦さんへの、何よりのご恩返しと気付いたのです。

そんな昭和六十一年の暮のことです。御導師さまからある御講席で、「あなたもそろそろご奉公させていただきなさい」とお折伏をいただきました。少しやる気にはなっていたものの、「何も分からない私に勤まるのだろうか」と思いましたが、翌年からお役をいただくことになりました。初めて頂戴したお役は副組長でした。人のお世話になりっぱなしだった私が、一転して人のお世話をさせていただくようになるのも妙ですが、お陰でお役のご奉公を通してご信心を学ぶことができ、お寺のご奉公もお手伝いできるようになりました。

やがて私は、平成十三年には連合次長、平成十五年からは弘通委員等のお役を持たせていただき、今は弘通部の副部長として及ばずながら頑張らせていただいております。また、昨年からは阪本禎造さんの勧めで、朝参詣の御宝前係も勤めさせていただくようになりました。ベテランの御宝前係の方たちに比べると、まだまだ至らぬところも多いですが、御宝前さまや御導師さまに身近にお仕えさせていただける喜びを感じて、一生懸命にご奉公させていただいております。

こうしてご奉公をさせていただけるようになって、母の言っていたことが良く分かるようになりました。家族が大過なく、毎日を無事に過ごさせていただけるのは、ほんとうに御宝前さまのお陰と有難く感じております。もちろんこれは、ご信心に無関心だった私を根気よく導いてくださった御導師さまやお教務さま方、佐伯峰春さん、トミ子さんご夫妻、三浦和子さん、阪本禎造さんほか、たくさんのご信

者方のお陰です。多くの方の育成の苦勞に報いるためにも、私自身がこれからもご信心を磨き、そして家族や組内のご信者、また縁ある方たちがご信心を身に付けられますよう、他の方のお世話を精一杯させていたきたいと思っております。

最後に今年の八月、本山記念参詣に参加させていただき、私はたいへん随喜をいたしました。次回、本山の御宝前さまにご参詣させていただく機会があれば、ぜひ子供たちや他のご信者方を誘って、一緒にご参詣させていただきたいと思っております。母が私を御講や御会式に誘ってくれた気持ちが、ようやく分かるようになりました。あのとき素直に参詣して、母を喜ばせられなかった分までご奉公させていただくことが、今の私にできる親孝行とも思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年九月十七日発表)

いつも励ましてくださる御法さま

第八連合第二信要組 井手佐恵子

ありがとうございます。

私は主人との結婚をきっかけに、本門佛立宗のご信心と出会いました。当時、初代の義父・井手岩松は早くに亡くなり、義母・マスマがご信心を相続して御講をいただいております。結婚当初の私は何も分からずにおりましたので、家にご信者さんが大勢来られて御講をお勤めする佛立宗の信仰に、いちいちびっくりしておりました。

やがて義母が亡くなり、主人が本格的にご信心を相続するようになって、私も叔母の大西シメ子さんに教わりながら、少しずつご信心に前向きに取り組むようになりました。そんなある日、御宝前さまのお給仕とお看経を毎日させていただくなかで、ご戒壇の位置を床の真ん中にお移したほうがよいと考え、主人と子供に手伝ってもらって早速改めたことがありました。御講に来られたお講師さまに「よくなりましたね」と褒めていただき、嬉しかったことを覚えております。そんなこともあって、毎日の生活の中で御宝前さまとの関わりが当たり前のようになっていきました。

三年前のことです。ある日突然、取引先の倒産という想像もしなかった事態が起こり、数千万円という多額の負債を負うことになりました。私はその金額の大きさに、頭の中がパニックになりました。今までも二度ほど、そのようなことがありましたが、その都度何とか乗り越えてきました。しかし今回は、乗り越える手立てもない程の金額に、大変ショックを受けました。

当時、長男は大阪で学生をしていましたが、他の子供二人と共に呼び寄せて家族会議をいたしました。長男には「学校を辞めて、働いてもらわんといかんようになった」と伝えました。主人のいつもと違う様子に、子供たちも真剣に話を聞いてくれました。そして、家が人手に渡って、出て行くことになるかも知れないという深刻な状況を、真っ直ぐに受け止めてくれました。

それからは本当に辛く、たいへんな日々が続きました。そんな苦しい時期に、私たち家族は御宝前さ

まから宝物をいただくことができたのです。それは「人々の思いやり」という、かけがえのない宝物でした。

主人の友達からは、親兄弟でもできないような心からの励ましや勇気付けをいただきました。それが、どんなに私たちを励ましたことでしょうか。普通であれば、人が離れていく状況の中で、「保証人でも何でもなってやるから、遠慮せずに言ってくれ」とまで言っていたのです。もちろん、保証人をお願いするようなことはありませんでしたが、その心根がほんとうに嬉しくて、「人間は一番辛いとき、人の心がよく見える」と申しますが、そのとおりだと思いました。

ほんとうに困っているときに、親身になって励ましてくれることの大事さを知った経験は、私の一生の宝物となりました。そして私は、「これは御宝前さまから勇気を頂戴したんだ」と感じ、とても有難く思いました。

このことに力を得て、毎日毎日御宝前さまにお縋りいたしましたところ、なんと倒産した会社に代わって、新しい取引先ができました。行き詰まりの真っ暗な中に、ぱっと光が差したように感じ、これこそが本当の御宝前さまのお陰だと思いました。

私たちは御宝前さまに助けていただいたのです。長男も学校を辞めずすみ、今は鉄工所の手伝いをしてれています。今の家族の幸せは、毎日のお看経とお給仕のお陰と、心から感謝をいたしております。

そんな、御宝前さまのお陰でいつもピンチを助けていただく私ですが、今年は一週間の間に兄と妹を相次いで亡くし、本当に悲しい思いをいたしました。妹の葬儀の日に兄が危篤状態となり、無念の最後を迎えたのです。

長い間病気と闘い、命を落とした妹の最後の姿や、残された二人の子供がベットに縋り付いて泣いていた姿が目から離れませんでした。また、手術に失敗し、お腹から一回に一リットル以上の出血を六回も繰り返し、ICUから出ることなく亡くなった兄の無念を思うとき、この気持ちをどう表現すればいいのかさえ分からない、悲しみとも虚無感とも言い難い気持ちになりました。しかし、そんな私を元の元気な心に戻してくださったのも御宝前さまでした。悲しみの中で御宝前さまに向かうとき、「いつまでもくよくよせずに頑張れ、頑張れ」「前を見て頑張れ」といつも後押しをしてくださり、私をお守りくださいました。心から感謝の気持ちで一杯です。

私には兄弟がたくさんいますが、私が一番元気に暮らしております。これも御宝前さまのお陰だと思います。そんな有難いご信心ですから、兄弟にもなんとか伝えたいのですが、田舎のことゆえ簡単に宗旨変えができずにいます。けれど諦めずに、いっしょにご信心がさせていただけようご祈願を続けさせていただきます。そして、これからも御宝前さまにお守りのいただけるご信心を、しっかりとさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十八年九月二十四日発表)

寒参詣で授かった御利益

第十連合第一大歓組 藤本直美

ありがとうございます。

私たちの家族が今の家に住むようになって、早くも二十年が経ちます。この家は、寒参詣の御利益で御宝前さまから授かりました。今日はそのときのことをお話しさせていただきます。

私たちは以前、松山の市営住宅に暮らしておりました。ある朝、娘を叱るとひどいひきつけを起こし、あわてて病院で診てもらいましたが、お医者さんからは「異常なし」と言われました。ひきつけを起こした原因が分からないことで私は不安になり、大変心配をしましたが、そんなときに寒参詣というご奉公があることを知り、早速お寺参詣をさせていただくことにしたのです。

当時、我が家から松風寺までは往復四十分かかりましたので、家庭の事情で本堂でのお参詣は五分か十分しか出来ませんでした。しかし私は、わずかな時間でしたが、縋る思いで一心に「南無妙法蓮華経」と御題目をお唱えしました。家に帰ると、両隣が創価学会でしたので、朝夕負けじと大声で拝みました。娘に元気に育って欲しいという一念で、ほんとうに一生懸命にお看経をさせていただいたと思います。

寒参詣を始めてしばらくした頃です。ふとしたことで、娘の同級生の親が「団地の子とは遊んではダメ」と話していることや、年上の子供からイジメを受けていることを知りました。御宝前さまは、娘のひきつけの原因が、そんな精神的なストレスであることを教えてくださったのです。

それからの私は、今まで以上に口唱に励むようになりました。「どうかよい方向へ向かいますように」と御宝前さまにお願いし、御題目をお唱えさせていただく声にも自然と力が込まりました。すると間もなく、主人が十年ぶりに不動産の会社に勤務している友人とバッタリ出会い、家の購入を勧めてくれたと話してくれました。私はすぐに、「御宝前さまのお導きだ」と感じました。そして話はトントン拍子に進み、わずか半年で現在の家を購入する運びとなったのです。

今の家は実家に近く、生活するにも便利の良い場所にあります。何より、春から嬉々として学校に通う娘を見ることができ、大きな御利益をいただいたと感謝させていただきました。

この家は、火災からも御宝前さまに守っていただきました。数年前のことですが、ほんのわずかしか離れていない北隣が火災で全焼したことがありました。燃え上がる炎を見ながら、「類焼は免れまい」と覚悟をしましたが、不思議なことに、隣接する御宝前さまの部屋の雨どいを焼くだけで済むという大きなお計らいをいただいたのです。御宝前さまのお導きで購入できた家を、再び御宝前さまがお守りくださったことに、私は改めて口唱の大事さを知りました。母がよく、「しっかり御題目をお唱えしていると、大難は小難にしてくださるよ」と言っておりましたが、まさにその通りだと実感しました。

その後、我が家では御戒壇を建立させていただきました。小さなお厨子から新しい御戒壇にお移りいただいた御宝前さまは何とも有難く、御題目をお唱えさせていただくのが楽しみになりました。お寺参詣も、私は早朝の勤めをしていてなかなかご参詣ができずにおりますが、寒参詣と夏期参詣だけはあれからずっと続けてお参りをさせていただいております。

これからも御題目さまをお唱えさせていただいて、いろんな難を乗り越えさせていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年十月八日発表)

両親の遺志に支えられて

第一連合第二妙泉組 吉村くるみ

ありがとうございます。

私の父は、昭和六十三年に持病の糖尿病が悪化して亡くなりました。半年間の入院生活は、母が病院に泊まり込みで介護にあたり、最後を看取りました。七十九歳でした。

その後、母は脳梗塞を起こし、パーキンソン症候群を患いました。少しずつ身体が不自由になり、介護が必要となりましたので、私と二人の妹は家での世話、病院での介護と五年間交代で看ましたが、平成十二年に父と同じ七十九歳で亡くなりました。

信者の子として生まれた母は、宗外者の父と結婚しました。父の実家は真言宗のお寺の檀家総代をしており、親戚縁者も多く、結婚当初は思うようにご信心もできなかつたと思います。そんな中で母は、父に本門佛立宗への宗旨替えを勧め、それを父は承諾しました。実家と檀家寺には手紙で宗旨替えを伝え、家の謗法払いをし、我が家は家族全員でご信心ができるようになったのです。しかしそれから、たび重なる親戚からのいじめや、ご信心への妨害といったことに悩まされ、また御宝前さまを傷つけられるようなこともあったと聞きました。そして、そのような逆境の中でも、母の強い御法さまへの思いは変わることはありませんでした。

母は長年、第二妙泉組の組長のお役をいただいております。とにかく母は、ことご信心に関しては自分にも、また家族や組内のご信者さんにも大変厳しい人でした。私や姉妹たちがお看経をしなかつたり、遊びを優先したりするとひどく叱られ、手を挙げられたこともありました。また、組内のご信者さんがご病気で苦しんでおられると聞けばすぐに自転車で出向き、お折伏をしてお助行をさせていただくような人でした。ですから謗法、とくに懈怠をしているご信者さんには、お折伏をせずにはいられない性格で、母の言葉を誤解される方もあったのではないかと思います。

不器用であったかもしれませんが、「なぜ助けていただけるのにご信心を優先しないのか」、「なぜ真剣におすがりしようとししないのか」と一途にご信心を思い考える母の強い心は、いつも言葉と態度に表れておりました。そして私たちにも、「ご信心を一番に考えなさい。素直に正直にご信心をしていれば、必ず物事がうまく運ぶ」「御宝前さまが導き守ってくださる」と、言い聞かせるように話してくれました。

そんな母が亡くなったとき、「私は母のように、きちんとご信心を続けていくことができるのだろうか」と不安になりました。そんな悩める頃のことです。一番末の妹の結婚が決まり、また私自身も家を購入するかどうかを思案しておりました。そんな矢先、すぐ下の妹が生死を分ける血液の病気になったのです。

妹は病院に懐中御本尊さまをお供して、必死で御本尊さまに向かい御題目をお唱えしておりました。私はお寺参詣をしてお供水をいただき、毎日病院に運び、妹の当病平癒を一生懸命にご祈願させていただきました。二ヵ月後、お計らいをいただき、妹は無事に退院することができました。主治医の先生の話によると、妹と同じ症状で助かった人は、今まで一人もいなかったと言います。背筋に寒気が走りましました。と同時に、「妹は両親の遺してくれたご信心のお陰で、御利益をいただくことができたのだ」と心から実感することができました。

その後、末の妹は主人の了解を得て金御本尊さまをお迎えすることができ、私も自宅の購入に踏み切ることができました。現在、妹は病院にかかりながら、お寺参詣や御講参詣に励んでおります。私たちを取り巻く状況は課題も多く、決して楽なものではありませんが、「御法さまが守ってくださる」と思うと気持ちが楽になり、「守っていただけるだけのご信心をしなければ」と思ってお奉公をさせていただいております。

父親がこのご信心に宗旨替えをし、母が厳しくご信心の有難さを教え、私たち姉妹のために遺してくれたことに感謝しています。まだまだ半人前の信者ではありますが、本門佛立宗の教えを守り、妹たちと励ましあいながらご奉公に頑張ります。

ありがとうございました。

(平成十八年十月十五日発表)

蘇った命で日々精一杯のご奉公

第七連合第一事行組 増田貞子

ありがとうございます。

今年の敬老会には、組内のご信者さんのお世話をいただいて、組の長寿会員が揃って参加させていただきました。大勢の懐かしいご信者の皆さんと婦人会のお弁当をいただき、また皆さんの素晴らしい演芸におなかを抱えて笑わせていただいた、とても楽しい時間でした。そして私は、こうして皆さんとお寺にお参りできるまでに元気にしていただいた御法さまに、心からお礼を申し上げたのです。

七年前の私は、死線をさまよっておりました。当時、心臓や肝臓が悪くて、掛かり付けのお医者さんから「こんな身体でよく七十一歳まで生きれたものだ。これ以上は私の手に負えないから、県病院か日赤に移って治療を続けなさい」と言われた私は、家族と相談の上で日赤病院に入院しました。平成十一年の五月初めのことでした。

日赤では検査の結果、まず心臓弁膜症の手術をすることになりました。心臓の三つの弁のうち、二つを人工弁に取り替える大手術でしたが、当日は組内のご信者宅でお助行をいただき、御導師さまにもお出ましいただけるとのことで、安心して手術に臨みました。お陰さまで手術は成功しましたが、数日後に容態は急変し、私は集中治療室に移ることになりました。そして三十日間も、意識のない状態が続くことになるのです。

当時のことを振り返って、何度もお見舞いくださった御導師は、「よく元気になれましたね」と喜んでくれました。担当のお医者さんは久しぶりに私を見て「死にかけてたオバサンか？良かったね」と言われました。家族は、「とにかく声をかけるように言われたので、見舞いのたびに呼び続けたよ」と話してくれました。当時組長だった鍵水さんも、「電話が鳴るたびにビクビクしたよ」と言っておりましたから、誰が見ても助からない状態だったのでしょう。ところが三十日後に奇跡的に意識が戻り、私は治療を続けることになるのです。

息子が病院に交渉してくれて、入院期間も延長いただき、都合九ヶ月の治療を日赤で行いました。長期の入院で足は弱り、歩行用の補助具を新調しての退院となりましたが、私の闘病生活は、これで終わったわけではありませんでした。たびたび手足が丸太のようにむくみ、入退院を繰り返しました。やがて腎臓の機能は限界まで低下し、平成十五年からは週に三度の人工透析を受けて命を繋ぐようになるのです。

透析を受ける辛さは、精神的にも、肉体的にも、聞きしに勝るたいへんなものです。この辛さを支えてくれたのが、ご信心でした。私はこの七年間、体調の優れた日はありませんでしたが、月々の御講参詣を続けてきました。お寺参詣はなかなか出来ませんでしたが、御講席も精一杯勤め、組内の皆さんの助けをいただきながら、組の中でのご奉公には極力参加をさせていただきました。そして、そんな中で、自分ではよく分かりませんが、皆さんから「ほんとうに顔色が良くなってきたね」と言っていたけるまでに元気になってきたのです。

体調の悪いのは相変わらずです。しかし、今回組の御講をお受けした日は、朝五時に起きてご供養の稲荷寿司を作らせていただき、皆さんに喜んでいただくことができました。前回の組御講では、頑張ってタコ飯を作らせていただき、皆さんに喜ばれたので、今回も油揚げのダシ取りから本格的に腕を振ったのですが、皆さんは私がゼイゼイ言いながら動くものですから、「よくやるねえ」と半ばあきれて感想を口にします。たしかにシンドイですが、御講は「精一杯勤める思い」が大事なのですから、私は自分に出来ることを精一杯、させていただきますと思うのです。

お陰で最近、また一つ御法さまに助けていただきました。毎週三度の透析に通う私は、正直言ってタクシー代が大きな負担になっていました。そんなある日、病院で知り合った透析仲間の方に、「自分が透析に行くついでに、車で拾ってあげよう」と言っていたのです。ほんとうに嬉しく思いました。ただ、いくらついでとは言っても、無料でタクシー代わりをしていただくのは気が引けます。そこで私は、「車代を貰ってください」と言いますと、その方は少し考えて、「じゃあ毎月千円だけ貰う」と言われ、毎回透析の日には送り迎えをしてくださって、親身に私の世話をしてくださるのです。ご信心をしない世間の人にも、こんな素晴らしい方がいらっしやることに感心し、「きっと御宝前のお使いで私を助けてくださっているんだ」と喜ばせていただいております。このご恩返しに、いつかこの方をお教化させていただきたいと、私は今、思っております。

とにかく、一度は死線に立ち、誰もが諦めていた私が、こうして敬老会に参加でき、御講を勤め、またお教化の縁をいただいて喜べるのは夢のようです。七年前に新調した歩行を補助する義足も、結局一度も使わないまましまっていますが、ゆっくりでも自分の足で歩けることにも私は満足をしています。

今年七十八歳を迎えた私は、これからも透析を続けながら命を繋いでいかなければなりません、長

年のご奉公の功德で毎日を過ごせる幸せを御法さまに感謝しながら、これからも頑張っていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年十月二十二日発表)

楽しかった本山参けい

第三連合第二勸信組 中山あおい

ありがとうございます。

八月二十日に京都の本山参けいに行かせていただきました。わたしは、たいこと、ごこうゆうしょうにんにおふせをおわたしするごほうこうをさせていただきました。

たいこは、たじいんのくんげかいの人たちとかわりばんこにたたきました。とてもあつかったけれども、わたしのすぐうしろにすわっていたたじいんの人が、うちわであおいでくれたのでうれしかったです。

さいごにごこうゆうしょうにんにおふせをおわたしする時は、とてもきんちょうしました。たぶん、にどとないごほうこうをさせていただけだったので、とてもいいおもい出になりました。わたしにとって、本山参けいは二回目だけど、今回はかいこう百五十年というきねんの本山参けいでした。そのきねんの参けいの中で、みんなといっしょにあせをかいて、たいこをいっしょうけんめいたいたこと、ごこうゆうしょうにんにおふせをおわたしするごほうこうがさせていただけしたことなど、たのしいおもい出がいっぱいのきねんの参けいになりました。

そしてもうひとつは、びわこが見れたことです。前の日からおとまりをして本山に参けいさせていただきましたが、とまったホテルがびわこのそばの「びわこグランドホテル」でした。今回本山にお参けいしなければ、びわこを見ることがなかったと思います。これもたいへんいいおもい出になりました。

ありがとうございました。

本山さんけいに行きました

第三連合第二勸信組第二勸信組 中山あんり

ありがとうございます。

夏休みに、きょうとの本山さんけいに行かせていただきました。わたしはたいこのごほうこうをさせてもらいました。さいしょはあまりうまくできなかったけれど、まわりのお兄ちゃんやおねえちゃんたちを見て、上手にたいこをいっしょにたたけたのでとてもうれしかったです。

でも、本山のたいこをたたくところはあつくて、とても足がいたかったけれど、さいごまでがんばることができてよかったです。

こんかいはぶつりゅうかいこう百五十年というきねんに、きょうとの本山にかぞくや、くんげかいの友だちとみんなで本山さんけいにいけたのはごりやくだと思ひます。

ありがとうございます。

(平成十八年十月二十九日発表)

信友の大切さ

第四連合第二長寿組 武市まゆみ

ありがとうございます。

私はご信心を始めて約六年になります。今日は、これまでいろいろと心の支えになってくれたご信心の信友、高松妙泉寺の辰巳敦子さんのことをお話しさせていただきます。

彼女と私は、私が悩みを抱えていた頃に祖母に勧められ、ご信心を始めるようになって間もなく知り合いました。出会いは、六年前に松風寺で開催された、佛立ボランティア・リーダー研修会に参加をしたことでした。私はまだ、お寺に来始めたばかりで、人と話すのも苦手だったのですが、副導師に声を掛けていただいて、恐る恐る捨て身の気持ちで参加をさせていただいたのです。

そんな私のビクビクした気持ちを救ってくれたのが辰巳さんでした。何がきっかけということはありませんでしたが、お寺は違っても同じ青年会員で、年齢も同じだったせいか、お互いに自然に打ち解けることができました。その後、私たちは手紙や電話、メールのやり取りを通して急速に仲良くなりました。そしてこれまで六年間、変わらずずっと親交が続いています。研修会に思い切って参加したことが、後に信友となる彼女との出会いとなり、それからのご信心を一段と楽しいものにしてくれました。また、私は今ヘルパーの仕事をしていますが、そのきっかけとなったのもこの佛立ボランティア・リーダー研修会でしたので、いろんな意味で私の転機となる、思い出のご奉公となりました。

手紙やメールの交換で始まった辰巳さんとの交流は、布教区のご奉公を共にしたり、お互いのお寺の御講にお参詣したりすることで深まっていきました。そんな中で、私は辰巳さんから多くのことを学びました。たとえば、いつも前向きで積極的にご奉公に取り組んでいることや、一人ひとりの人に対して丁寧に接しているところは、引っ込み思案で人付き合いの苦手だった私には大きな刺激となりました。

辰巳さんは、お父さんから習ったと言って、私に「ほうれんそう」、つまり報告・連絡・相談というご奉公のツボも教えてくれました。青年会のご奉公に馴れず、なかなか連携の取れなかった時期に、みんなで足並みそろえて動くためにどうすれば良いのかを、そんな形で教えてくれたのです。

感心したのは、私が悩んでいるときに、私の良いところを見つけて励ましてくれることでした。相手の悪いところより、良いところを見てあげるのは難しいことだと思います。しかし辰巳さんは、いつも相手を大切にしているから、難しい良いところが見えるのでしょう。私も辰巳さんのように、人の悪い面より良い面に目がいくようになりたいと思いました。

また、太鼓が上手く叩けないときは、「一緒に練習しよう」と言ってくれたり、「百人一首を出さない

の？」と共通のご奉公に声をかけてくれたり、ご信心の用語を解説してくれたり、とにかく私のご信心が進むよう、こまやかな気配りで支えてくれました。そんな、辰巳さんから学んだ一つひとつのことは、私も新しいご信者さんに対して、ぜひ見習って実行していきたいことばかりです。

今でも辰巳さんとは何でも相談し合い、楽しいことや悲しいことを話したり、分かち合ったり、時にはお折伏をし合ったり……といったお付き合いをしています。

お互いに良いときも悪いときもありましたが、それでも変わらずお付き合いをさせていただけたことに、本当に不思議なものを感じます。そして今は、「これがご信心で結ばれた人間関係の素晴らしさかな」と感じるのです。

これからは、そんなご信心の友を彼女だけに限らず、周囲の皆さん、特に青年会員の仲間たちへと広げ、刺激し合えるより良い関係を築いていきたいと思っています。そのためにも辰巳さんや私を取り巻く人たち、家族、ご信者さん、職場の仲間、その他もろもろの人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、真心のこもったお付き合いができるよう頑張ります。

ありがとうございました。

(平成十八年十一月五日発表)

御宝前をお迎えして変わった我が家

第五連合第一本清組 樞尾要輔

ありがとうございます。

私は入信してまだ日が浅く、皆様方のような豊富な経験ありませんが、本日は本門佛立宗に入信し、本年我が家に御本尊さまをお迎えさせていただきたいきさつや、そのときの喜びについてお話しさせていただきます。

私は松風寺の信者である妻と、平成四年に結婚しました。妻は祖母・三好梅子の代からの信者で、幼いころから祖母と一緒によくお寺に来ては御題目を唱え、本門佛立宗の信仰の中で育ちました。結婚当初は、お寺の二階の食堂で本を読んでもらった思い出話や、ご信者の方々の熱心さについて、妻はよく話してくれたものです。

しかし、当時の私はまだ入信しておらず、仕事の関係で市外に住んでいたこともあって、ときどき妻に連れられてお寺に参詣する程度でした。皆様が熱心にご信心に励まれる姿に驚きつつも、自分がそのように信仰に向き合うことは、ほとんど考えてもみなかったのです。

そんな私が入信を決意したのは、結婚から数年が経ち、県外に転勤したのがきっかけでした。新天地での仕事や生活の不安が重なり、「このままではいけない。何かしつかりしたものを持たなければいけない」と考えて、私は懐中御本尊をいただきました。お陰さまで御本尊を肌身離さず身につけ、御題目を唱えるようになってからは、新天地での仕事や生活にも慣れ、家族とともに無事、健康に過ごすこと

ができるようになりました。

五年が過ぎ、私は再び県内への転勤となって、また新たな土地での生活が始まりました。このころになると、将来について家族とよく話すようになりました。転勤のたびに社宅住まいでは心が落ち着かず、「まるでジブシー生活を送っているようだ」とさえ思うようになっていたのです。

そんなある日、遠く離れた友人と話す機会がありました。同じ境遇の友人も、同じような悩みをかかえていることを聞き、私は「家族を含めて、将来を真剣に考える時期に来ているのだ」と自覚するようになりました。しかしこのとき、答えはすぐに見つかりませんでした。今から振り返れば、私の心は、どのようにしていいのかわからない焦りや不安にあふれていたように思います。

しばらくして、その友人から転宅の手紙が届きました。そして、そこに記された「自宅を建設した」との不意の知らせに大変驚き、友人の決断に頭の下がる思いがしました。精神的な不安や経済的な不安、将来の健康への不安などいろいろあったと思いますが、人生にひとつの道を切り開いた決断は、私に大きな刺激を与えてくれました。

この友人の影響や、当時の住宅ブームにもあやかり、私も自宅の建設に踏み切りました。そして一昨年に、小さいながらも念願の我が家を持つことができました。新居が完成したときは、「これでやっと落ち着ける」と生活の本拠地が定まったことに、家族と喜ばせていただきました。

ところが、時間が経つにしたがって、何かひとつ足りないもの、空虚なものを感じるようになりました。そしてそれは、自分達の生活の芯となるはずの、御宝前がないためだと気づきました。箱となる家はできたものの、やはり心のどこかに、足りない何かを感じていたのかもしれませんが。早速、母や組長の川本さま、同じ職場の新山さんご夫妻に相談し、副導師のお世話で御宝前をお迎えするための準備を進めていただきました。今年の寒参詣中のことでした。

念願の御本尊奉安は、三月十八日でした。組長さん、樋口さん、新山さんご夫妻のご参詣をいただき、副導師のお給仕で御本尊さまが奉安されました。初めて我が家で皆さんとお看経をさせていただいたときの感激は忘れません。小さいながらも、お灯明やお供物で荘厳された御本尊さまは何とも有難く、お世話をいただいた皆さんに本当に感謝をさせていただきました。

御宝前をお迎えした部屋は、それまでの無機質な、何か物足りない空間とはまったく違う空気に満ちていました。そして我が家では、「御宝前をお迎えしてからは何かが違うね」「やっと心が落ち着いた気がするね」と家族で話すようにもなりました。

入信してから数年が経ちましたが、転勤族の私には、まだ皆様ほど豊富なご奉公の経験はありません。ただ、いろいろな不安を抱えて迷っていたときや、将来への道筋が定まらずに思案していたときなど、数々の場面で御宝前さまに支えられ、助けていただいたことには心から感謝をしております。そして今日まで無事に過ごせたことも、御本尊さまからいただいた御利益と有難く感じ、また家族が今日まで健康であることに、何よりも御礼申し上げたく思っております。

これからも御法門の聴聞に努め、ご信心を家の柱とさせていただく有難さを少しでも多くの方に伝えていけるよう、日々精進してまいりたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十八年十一月十二日発表)

義父の十七回忌を終えて

第六連合第一本因組 梅木由紀美

ありがとうございます。

我が家に護持御本尊さまをお迎えできたのは、主人の実家が代々お世話になっているお寺から、主人の兄に「お父さんの十七回忌法要は、いかがなさいますか」という電話があったのがきっかけでした。

主人の兄は勤めの関係もあって、早くから九州大分の実家を出て福岡に住んでおりました。兄は心が優しく、また学識もある立派な人で、大学の学長を二年前までされておりましたが、残念ながら信仰にはまったく関心がありませんでした。ですから、主人の父が亡くなっても、三回忌以降は追善の供養をすることもなかったのです。そんな事情もありましたので、兄は私の主人に、「どのようにしようか」と相談の電話をかけてきたのです。

相談を受けた主人は返答に困り、私にどうしたら良いかを訊ねてきました。お恥ずかしいことですが、我が家は私が松風寺に入信してからも、私が朝参詣と家でのお看経をさせていただく以外は、御宝前さまを拝む人のいない状態でした。そこで事情を聞いた私は、以前から気になっていたことを主人に話しました。と言うのも、主人の実家は義父が亡くなってからは人の住まない家となり、兄はご先祖のお位牌だけは福岡に持っていかれましたが、お仏壇はそのままになっていたのです。

誰もいない家にお仏壇が埃をかぶって放置されているのでは、ご先祖もさぞ寂しい思いをされていることでしょう。私はそのことがとても気掛かりでしたので、「実家のお仏壇をそのままにするのなら、一日も早く私達の家を持ち帰って、粗末にしていたであろうお義父さんやご先祖を、我が家できちっとご回向させていただきましょう」と主人に話しました。すると主人も、ご先祖の供養ができてないことを気にしていたらしく、早速大分の実家に行って、お仏壇を運んでくれました。

実家のお仏壇は、長年埃を被って汚れてはいましたが、元々が立派な造りでしたので、根気よく丁寧にお掃除をさせていただくと見違えるほどの輝きを取り戻しました。もちろん私が今まで護持をしていた小さな御戒壇とは、比べ物にならない存在感がありました。そこで我が家はこれを期に、護持御本尊さまをお迎えさせていただくことにいたしました。

ご奉安の日、護持御本尊さまを荘厳させていただいた実家のお仏壇が座敷の真ん中に落ち着くと、家の中の空気まで落ち着いたようなすがすがしい気持ちになりました。一座のお看経が始まり、御題目をお唱えしながら、私は「これで実家のお仏壇も、本門の御題目さまが住まわれる御戒壇として蘇ったのだ。主人のご先祖も、きっと喜ばれているに違いない」と思い、何よりも嬉しく、また安堵いたしました。

主人の両親は信仰が厚く、ご先祖を大切に守っておられました。そんな両親の元で育った主人も、以前は手を合わせる人だったのですが、姉が早く亡くなり、次々と身近な人が亡くなってからは「神も仏もない」などと言って、いつの日からか手を合わさなくなっておりました。

ところが縁あって本門佛立宗に入信し、熱心な齊坂さんのお世話で私が朝参詣にお参詣するようになりましたので、最近主人も仕事へ行く前に、必ず御宝前さまに手を合わせるようになっておりました。そんな主人が、今回の護持御本尊さまをお迎えできたことをとても喜んでくれたのも、私の大きな喜びでした。

また、今回のご奉安にあわせて、御導師さまにお願いして過去帳を作っていたのですが、主人はそのことを何より喜び、「こんな嬉しいことはない。いつもご先祖のご命日がわかり、手を合わせられる」「これもお前がお寺にお参りしてくれるお陰。齊坂さんのお陰」と申しております。

お義父さんの十七回忌の法要は、こうして立派に蘇った我が家の御宝前で、御導師さまに勤めていただくことになりました。次男である主人が願主となった法要ですが、福岡の兄も心から喜んでくださり、兄弟や子供たち、孫たちが揃ってご先祖を想うよき法要がさせていただきましたことを、皆それぞれに心から喜んでおりました。

法要を終えた私は、御宝前さまのお導きを心から有難く感じました。いつも良い方向へと導いていただくご恩に報いるためにも、これからも精進してまいりたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年十一月十九日発表)

祖父や両親のご信心を相続して

第七連合第三事行組 梶原史博

ありがとうございます。

私は物心がついたころから、家では両親が本門佛立宗のご信心をしていて、私自身も母に連れられてお寺にお参詣をしておりました。そのときは意味も分からずにいましたが、今になって思えば、「小さな頃にご信心の姿を学ぶということは、とても大事なことだったなあ」とつくづく思います。

父の父、祖父は八幡浜別院の時代から、寺号公称して「本唱寺」になる大事な時期に、局長のお役をいただいでご奉公しておりました。子供心に祖父の姿も見て育ったのだと思います。とにかく私は、「ご信心は大切なものだ」ということを、家庭の中で自然に身に付けることができたのです。

私は四歳のころから小学校五年生のころまで、ネフローゼ症候群という難病を患って入退院を繰り返していました。そんな私の病気のために、家庭の生活はガラッと変わりました。それと同時に両親は、今まで以上に御宝前さまにおすがりし、ご信心を重ねてくれました。お陰で私はその難病を克服し、完治することができたのです。子供ながらに「これが御利益というものなのか」という思いを持ち、少しずつですが、私の中でご信心が育っていったように思います。

その中でも、今までで一番「御利益をいただいた」と実感したのは、あの阪神大震災のときでした。当時、私は西宮市内の文化住宅に一人暮らしをしながら、大阪で調理の仕事をしていました。忘れもしない平成七年一月十七日の午前五時四十六分、浅い眠りだった私は、グラグラとした揺れを感じて、

「あっ、地震だ」と目覚めました。しかしそのときは、いつものようにすぐに治まるだろうと思っていました。ところが予想に反し、さらに長く、強い揺れが襲ってきたのです。

とても長い時間が過ぎたように感じました。そして最後に地面が抜け落ちていく感覚がして、気がつくとも揺れは治まっていた。周りを見るとガスくさく、台所には点滅するガス警報機が見えました。暗い中で目を凝らすと、隣の部屋は畳が縦に立っており、御宝前さまと私の寝ていた畳二畳分のスペースが、ちょうど浮いたような状態になっていました。

外に出てみて驚きました。二階建ての文化住宅の一階部分は押し潰されるように全部が崩れ、私の住んでいた二階がそのまま一階になったような状態でした。もちろん同じ住宅に住んでいた一階の人は、残念ながら亡くなられました。まだ朝の光が届かない街は、まるで地獄絵を見るような恐ろしい光景に変わっていました。

ご承知のようにこの震災は、神戸の街を中心に深い爪痕を遺し、多くの人命を奪った大災害となりました。そんな中で、私は無傷で助けていただいたことに、心から不思議な思いがしました。そしてこれこそが、「御宝前さまのお護りをいただくということなのだ」と実感したのです。

私は今までに、ほかにも何度も命を助けていただいています。困ったことが起きても、いつも御宝前さまがいい方向に導いてくださっていると感ずることが出来ます。そしてこうして御宝前さまのお護りを感じることが出来るのは、子供の頃から背中でご信心の大事さを教えてくれた、祖父や両親のお陰と感謝をしています。

これからも信行相続に励み、御宝前さまと共に人生を歩んでいきたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十八年十二月三日発表)

叔母に授かったご信心

第九連合第一妙唱組 岩城政代

ありがとうございます。

私が本門佛立宗のご信心にお出会いしたのは、娘の佳子が一歳七ヶ月という短い命で亡くなったのがきっかけでした。主人の母は、信行体験談の発表が始まって知ってくださる人の増えた「岩城たかの」です。その義母の妹が「奥山ハツ」と申しまして、古いご信者さまならおそらく覚えていてくださるだろうと思いますが、なかなか熱心なご信心をいたしておりました。その奥山の叔母から、「佳子の追善供養のためにも、ぜひご信心をさせていただきなさい」と入信を勧められたのです。

当時、義母は義父の反対もあって、押入れにお厨子をおまつりしての一人信心でした。そんなことから、教化親は叔母の奥山ハツになってもらい、住まいは三津でしたが、叔母と同じお寺の近くの組に所属させてもらいました。長男の功一が佳子の亡くなるほんの一ヶ月前に生まれておりましたので、私は功一を背負って遠くの御講やお寺にお参詣させていただいたものでした。

主人は国内航路のタンカーの機関長をしており、その頃もほとんど留守をいたしておりました。たまに帰ってきても、まさしく「横のものを縦にしない」というような人でしたから、私は手の掛かる子供を抱え、一人で育てたようなものでした。そんな私にとって、ご信心は大きな支えとなりました。お陰さまで功一も大過なく無事に成人し、今日に至っております。

私にご信心の有難さを感じたのは、入信して数年後のことでした。それまで我が家は借家住まいをしており、願うことなら家を持ちたいと思っておりました。そんな矢先に、近くの家が売りに出たのです。家が欲しいという気持ちはありましたが、いざ買うとなると大きな買い物ですからたいへんです。手持ちの予算や先方の条件など、折り合いのつくよう交渉していかなければなりません。少し迷いましたが、せっかく近所に物件が出たのですから、これ幸いと購入するつもりで話をしました。

ところが事前の心配もどこへやら、不思議なことになんの障害もなく、すんなりと手に入れることができたのです。叔母がさっそくこのことを喜んでくれて、「ご信心のお陰だよ」と言ってくれました。なるほどこんなに近くで、しかも無理なく家が求められたのですから、「これが叔母の言う御利益なんだなあ」と喜ばせていただきました。

以来、大きなご奉公はできませんでしたが、御講参詣やお寺参詣はできる限り頑張っ、勤めさせていただくようになったのです。

最近私には、特に嬉しく思うことがあります。私は足が悪く、平成十六年に手術をしたのですが、それからは今までのように歩くことが難しくなりました。そんな私の様子を見て、十年前に定年退職をした主人が、やさしく世話をしてくれるようになったのです。

私の足の病気のお陰で、あの「横のものを縦にしなかった主人」が、今は私と息子のために食事の支度から家事の一切をしてくれます。病院に行く私にも付き添ってくれます。恥ずかしいので「お父さん、一人で行けるから」と言っても、「もしお前がこけて、ほんとうに動けんようになったら、わしが面倒をみるようになるぞ」と言って必ず付き添ってくれるのです。昔のままの主人なら、私の生活範囲はずっと不自由になっていたことを思うと、これも御法さまのお陰と有難く感じております。いっしょにご参詣ができるようになると更に嬉しいのですが、今は主人の変化に心から感謝をしているところです。

義母も九十歳を遥かに超して、今尚元気に頑張ってくれています。いつもご信心の有難さを忘れず、御題目を離さない義母は、私のよいご信心のお手本です。そんな義母に教わりながら、叔母から授かったご信心を続けてきたお陰でいろんな御利益をいただいて来ましたが、振り返ると今がとても幸せに感じます。

今、私たち家族は、長年暮らした我が家をそろそろ建て替えようかと考えています。あとは息子が法灯相続をして、さらに結婚が早く決まって、かわいい孫の顔が見たいと思っているところです。

これからも家族が日々御法さまのお護りをいただけますよう、できる限りのご奉公をさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十八年十二月十日発表)

母のお助行をきっかけに

第九連合第二妙唱組 窪池真理子

ありがとうございます。

生まれたときから信者の私が、娘のみゆきと朝参詣を始めるようになったのは、母・山本ショブ代の手術がきっかけでした。

それまでの私は、家庭を持ってからも主人の理解を得、一応ご信者の仲間入りはさせていただきましたが、とくに熱心にご信心をすることはありませんでした。母からたびたび電話があり、「いついつ、どこのお席で御講だから参りなさい」と将引されましたが、あまり気にすることもなかったのです。

そんなある日、身体の不調を覚え、とても人に言えない苦しみの中、母から護持御本尊さまをお受けするよう折伏されました。無事にご奉安させていただいたときは、やっと家の中に縋るべき柱ができたような気がして、心から安堵させていただいたものです。ですが私は、まだまだちゃんとしたご奉公が出来ていたわけではありませんでした。

平成十一年だったと思いますが、母が大きな手術をすることになりました。この手術は、一年ほど前から医師に勧められていましたが、母が今ひとつ踏み切れなくて伸ばし伸ばしにしていたもので、その結果、思いもよらぬ大きな手術となったのです。

手術の日、お寺の本堂でお助行をしてくださるというので、私も参詣させていただくと、本堂はいっぱいのご信者さまで驚きました。そして御導師はじめお教務方にもお出まじいただき、それはそれは熱のこもったお助行をしていただきました。皆さんからは「おばあさんの人徳ですよ」と言っていました。子供としてこんなにたくさんの人に応援してもらえる母が、少し誇らしくも思いました。そしてそのとき、初めて私は心の中に、ご信心の素晴らしさを素直に受け止める気持ちが沸いたのです。

それ以来、病院の母に毎朝お供水を届けるために、娘と共に朝参詣を始めました。母が退院してから朝参詣は続き、七年が経過して、先日二千四百日達成の御礼言上をしていただきました。朝参詣を始めて、御法門を聴聞させていただくようになってから、母がこれまで一生懸命にご信心をしてきた気持ちが少しずつ分かるようにもなりました。

ご信心の有難さを実感したのは、娘のみゆきが「バセドー氏病」を発症した時のことでした。娘は一年位前から身体に異変があり、身体中に湿疹ができたり、発熱が頻繁に起こっていたようでした。イライラして朝起きも大変だったようですが、娘が運転する車に母や道沿いのご信者さんをお乗せして朝参詣をしていたので、私には何も言わず頑張っていたのです。しかし、耐え切れず病院で診断を受けた結果、病気が分かりました。ショックでした。この病気は若い人に多く、一生お薬を離せないと聞いています。とにかく御法におすがりし、良い方向へと導いていただかねばと思いました。

母からも早速、「五月の連休中は遊びに行かず、毎日お線香三本のお看経をしなさい」「娘には一升のお供水をいただかせなさい」と言われ、私はその通りに実行しました。そして娘は八月中ごろに手術をして、月末には退院をすることができました。

お陰さまで娘は、入院中はお薬を飲みましたが、退院以来一度もお薬のお世話にならずに済んでいま

す。また今も後遺症がなく、元気に朝参詣に、仕事にと頑張っています。御題目の有難さを、身に染みて教えていただいた出来事でした。

こうして朝参詣を続けているお陰でしょうか。左官をしている主人も、持ち前の器用さもあって次々と仕事があり、「ご信心のお陰」と喜んでくれています。

きっかけは母の病気でしたが、「今ではお寺に行けばあの人に会える」などと楽しみを増やしなが、毎朝のお寺参詣に頑張っています。振り返ると、いざというときにいつも母の教えがあり、ご信心におすがりすることを学んで困難を乗り越えてきたように思います。母には照れくさいので、面と向き合っ御礼など言ったことはないのですが、心の中ではいつも感謝しています。

これからもそんな母のためにも、家族のためにも、朝参詣に励みたいと思っています。

ありがとうございました。

(平成十八年十二月十七日発表)

母、矢野シズカの思い出

第十連合第一大歓組 郷田紀代

ありがとうございます。

母が入信したのは昭和五年の頃と思います。きっかけは、次女である私の姉を亡くしたことでした。母の不注意で、まだ幼かった姉の頭をぶつけ、その数日後に姉は亡くなるのですが、母はこの不幸な事故に気を病んで、鬱々とした毎日を送っていたようです。そんな中でご信心のご縁をいただき、母は姉の供養のために、真剣にご奉公に取り組むようになるのです。

当時、我が家は父の仕事の関係で雄郡の方に住んでおりました。決して道後のお寺に近い場所ではありませんでしたが、入信後の母は熱心にお寺参詣をしていたようで、一番上の姉も、「母の手に引かれて、よくお寺にお参りさせていただいた記憶がある」と申しておりました。

父の退職で北伊予に移り、お寺は更に遠くなりましたが、母のお寺参詣は続きました。私もこの頃から、ご参詣の記憶があります。寒参詣のときなどは、遠方の私たちは近所のご信者さん宅を道場にして晩にお参りをしていましたが、ご供養当番の日は暗いうちから起こされて、眠い目をこすりながらご参詣をしました。朝が早いのはたいへんでしたが、帰りには必ず湊町に寄って買い物をしてくれるのが楽しみで、私たち子供もがんばって早起きをしたものでした。

当時の母のご奉公仲間は、同じ組の大東さん、大西信子さんといった人たちで、お二人ともご信心に熱心でしたので、気が合っ毎日のようにお助行に出掛けておりました。ご老尊のお供をして、内子や五十崎の山奥のご信者さん宅へ三人で出掛けることも珍しくなく、北伊予に移ってからの母は、そんなご奉公一筋の生活をしておりました。今思えば、ご老尊や仲良しのご信者さんとのご奉公の道中が、母のご信心を磨いていったように感じます。当時は時間をかけ、遠いところへも歩いてご奉公をするのが普通でしたから、たくさんのご信心の話ができることを、母はほんとうに喜んでおりました。ただ、私

は学校から帰っても母の姿がないことが多いので、少し寂しい思いをしておりました。

近所の佐賀恵さんをお教化させていただいたのもこの頃でした。それまで見ず知らずの佐賀さんが、体調を壊しているのを聞いて一週間通い続け、ついにお教化した話を聞いたのはずいぶん後のことです。このとき母は、皆に合わせて口唱のできない佐賀さんのために、一週間の組のお助行の前後にも特訓のお看経に通っていたことを聞き、子供の頃の寂しさの訳を知りました。そして、他の人が御題目を唱えて幸せになれるよう、必死でご奉公をしていたであろう母を想像し、誇らしく思ったものでした。

そんな母でしたから、子供たちにもお看経は厳しく躰けておりました。晩になると、家族全員でお看経をさせていただくのが我が家のモットーで、これは一日も欠かさず続けました。ちょうど食事が済む頃に面白い娯楽番組が始まりますので、子供たちがテレビを観ながらグズグズしていると、母は「こらあー」と呼びに来ます。必ずです。「今日はいいでしょう」と許してくれる日はありませんでした。

私が適齢期になり、結婚の話が出るようになって、母の一番の関心はご信心でした。「我が家は本門佛立宗のご信心をしております。ご信心をさせていただけないなら、娘はやれません」という条件付で、私は郷田家に嫁いだのです。

結婚してからも、私は主人の転勤で大阪や千葉にも住みましたが、母はそのたびに御導師さまに最寄のお寺を紹介いただき、母に伴われてご挨拶に伺いました。そして先方のご住職やご信者さんに私の育成を丁寧に頼み、私には厳しく「今後はここにお参りするよう」と言いました。母は何事につけても厳しい人でしたが、殊にご信心に関しては厳格そのもので、少しの妥協もありませんでした。

そんな母でしたので、ご信心については歯に絹を着せない物言いが常で、人によっては誤解することもあったようですが、御法を信じ、御題目口唱で幸せになって欲しいという気持ちは人一倍強く、身近な私たちは厳しさの中にあるやさしさを十分に感じておりました。

母の臨終はほんとうに美しく、寂光参拝の姿を私たちに見せてくれました。ご奉公の功德で飾られる素晴らしさを、身に染みて教えられた体験でした。

私たちが今、平穏で毎日無事に暮らしていけるのも、母の遺してくれた功德と、厳しいお看経の躰けのお陰と感謝をしております。我が家は兄姉、子供たち、孫たちも皆法灯相続ができ、母のご信心を相続していますが、今後も母を目標に、多くの人に御題目口唱のご信心をお伝えできるご奉公を目指したいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十八年十二月二十四日発表)